

# 求道

第 拾 叁 卷  
第 貳 號

三 月 號

- 勝鬘經を拜讀す 「聖德太子の信仰と親鸞聖人」
- 「教行信證」信卷講話 横超釋
- 人生の轉換 教誨二席
- 慶讚錄
- 歎異鈔 第十三章 「藥あり毒をこのむべからず」

大正五年三月十日發行(毎月一回十日發行)

大正五年二月五日第三種郵便物認可



求道第拾參卷第貳號目次

▼勝鬘經を拜讀す

▼『教行信證』信卷講話

近角常觀

第十席 横超釋

一横超斷四流の文 二一實則滿の眞教 三一念須臾の頃に  
四平生業成 五超發無上殊勝願 六横截五惡趣惡趣自然閉  
七斷字の意義 八前念命終後念即生

▼慶讃録

武田慧宏

▼歎異鈔講義

近角常觀

第十三章 (承前)

「藥あり毒をこのむべからず」

▼人生の轉換

近角常觀

其一  
其二

▼我が身の悪しさを苦にする人に

前號要目

▼夢幻の人生と眞實の如來

▼一向專修の意義

▼現代青年の煩悶に同情す

▼求道會館落慶式報告講演速記

▼求道會館落慶式始末

▼釋迦嚴父の抑止、彌陀慈母の引接

▼我が身の悪しさを苦にする人に

▼一向專修の意義

▼現代青年の煩悶に同情す

▼求道會館落慶式報告講演速記

▼求道會館落慶式始末

▼釋迦嚴父の抑止、彌陀慈母の引接

▼我が身の悪しさを苦にする人に

▼一向專修の意義

▼現代青年の煩悶に同情す

▼求道會館落慶式報告講演速記

▼求道會館落慶式始末

▼釋迦嚴父の抑止、彌陀慈母の引接

▼我が身の悪しさを苦にする人に

▼一向專修の意義

▼現代青年の煩悶に同情す

▼求道會館落慶式報告講演速記

▼求道會館落慶式始末

▼釋迦嚴父の抑止、彌陀慈母の引接

▼我が身の悪しさを苦にする人に

▼一向專修の意義

▼現代青年の煩悶に同情す

▼求道會館落慶式報告講演速記

▼求道會館落慶式始末

▼釋迦嚴父の抑止、彌陀慈母の引接

▼我が身の悪しさを苦にする人に

▼一向專修の意義

▼現代青年の煩悶に同情す

▼求道會館落慶式報告講演速記

▼求道會館落慶式始末

▼釋迦嚴父の抑止、彌陀慈母の引接

▼我が身の悪しさを苦にする人に

▼一向專修の意義

▼現代青年の煩悶に同情す

▼求道會館落慶式報告講演速記

▼求道會館落慶式始末

▼釋迦嚴父の抑止、彌陀慈母の引接

▼我が身の悪しさを苦にする人に

▼一向專修の意義

▼現代青年の煩悶に同情す

▼求道會館落慶式報告講演速記

▼求道會館落慶式始末

▼釋迦嚴父の抑止、彌陀慈母の引接

▼我が身の悪しさを苦にする人に

▼一向專修の意義

▼現代青年の煩悶に同情す

▼求道會館落慶式報告講演速記

▼求道會館落慶式始末

▼釋迦嚴父の抑止、彌陀慈母の引接

▼我が身の悪しさを苦にする人に

▼一向專修の意義

▼現代青年の煩悶に同情す

▼求道會館落慶式報告講演速記

▼求道會館落慶式始末

▼釋迦嚴父の抑止、彌陀慈母の引接

▼我が身の悪しさを苦にする人に

▼一向專修の意義

▼現代青年の煩悶に同情す

▼求道會館落慶式報告講演速記

▼求道會館落慶式始末

▼釋迦嚴父の抑止、彌陀慈母の引接

勝鬘經を拜讀す

聖德太子は自ら皇太子佛子勝鬘と名のらせたまひ、  
又親鸞聖人は南無皇太子勝鬘比丘と讃歎したまふ次第  
なれば、聖德太子の御精神は、勝鬘經にあることは明  
らかなることである。其勝鬘經には如何なることが書  
かれてあるか、又親鸞聖人は其勝鬘經を如何なる意義  
に於て、讀まれたるのであるかといふことを、伺ふて  
見たいと思ふのである。

推古天皇十四年丙寅七月、皇太子御年三十五歳の時、  
天皇の勅を蒙りて勝鬘經を講説したまひたのである。  
鹿尾を握て師子の座に登り、其儀僧の如しとあるの  
である。又同十九年辛未正月太子御年四十歳にして勝鬘  
經の疏を製したまひたとある。此の如く度々聖德太子  
が講説したまひたとある勝鬘經、及其太子の義疏まで  
が存してあるのである。今は其要領だけを所感のまゝ

書き列ねて見ようと思ふのである。

勝鬘夫人といふは波斯匿王及び末利夫人の女であ  
る。義疏には之を釋して曰、勝鬘とは世は七寶を以て  
其肉身を嚴る、而るに今萬行を以て其法身を嚴るが故  
に、勝鬘と云ふとある。父母が法鼓經の説法をきき、大  
乘を信じてより、久しからず共に謂て曰く、勝鬘夫  
人は聰慧利根通敏にして悟り易し、若し佛を見奉らば  
心疑なきを得ん、宜しく時に信を遣して其道意を發す  
べしとて、勝鬘夫人に書を與へて如來無量の功德を讚  
して示された。勝鬘直ちに希有の心を生じて偈を説い  
た。

我聞佛音聲 世所未曾有 所言眞實者  
應當修供養

眞實といふことを義疏に、聖體圓備にして偽に非る

を真といふ、至徳凝然として虚なきを實といふとある。如來は即眞實である、至心は至徳の尊號を體とするのである。劈頭直に如來は眞にして僞に非ず、實にして虚に非る至徳圓備せる聖體であると示されてある。

仰惟佛世尊 普爲世間出 亦應垂哀愍 必令我得見

默然として佛を感ずることを明にすと釋されてある。

此經にあらはる、佛は、眞實なる佛を感ずるのである。所謂實驗するのである。決して冥想するのではない。直接に佛を實感するのである。果せる哉。次の文に

即生此念時 佛於空中現 普放淨光明 顯示無比身

勝鬘及眷屬 頭面接足禮 咸以清淨心 歎佛實功德

恰も觀經に於ける住立空中の佛と全く同一である、淨光明を放ちて無比身を顯示したまふたのである。勝鬘

宛然として讚阿彌陀佛の偈を讀むが如くである。而して初の一偈は覺如上人報恩講式文の如來唄である。次に勝鬘救を請ひ如來護を許したまひ。勝鬘重て敬を致された。

哀愍覆護我 令法種增長 此世及後生 願佛常攝受

我久安立汝 前世已開覺 今復攝受汝 未來生亦然

我已作功德 現在及餘世 如是衆善本 唯願見攝受

初の一偈は善導大師の往生禮讚にも、屢反覆せらるゝ所であるが、特に親鸞聖人が皇太子聖德奉讚の奥書に於て

南無救世觀音大菩薩 哀愍覆護我 南無皇太子勝鬘比丘 願佛常攝受

直に清淨心を以て、佛の實功德を歎したとある。如來眞實功德相たる念佛を讚歎したてまつるのである。實に勝鬘經は勝鬘夫人實驗感得の信仰告白である。而して此如來が盡十方無碍光如來である。此眞實功德が南無阿彌陀佛である。達觀し來れば、聖德太子の理想たる勝鬘經が、其儘實現し來りたるが親鸞聖人の信仰である。是即ち念佛成佛是眞宗である。此の如く如來の眞實功德を歎じて、法身解説般若の三徳を擧げてある。

如來妙色身 世間無與等 無比不思議 是故我敬禮 如來色無盡 智慧亦復然 一切法常住 是故我歸依 降伏心過惡 及與身四種 已到難伏地 是故禮法王 智慧身自在 攝持一切法 是故今敬禮 敬禮過稱量 敬禮無譬類 敬禮無邊法 敬禮難思議

とあるが、全く此勝鬘經の文より出づることは疑なきことである。特に三朝淨土の大師等、哀愍攝受したまひて、眞實信心すめしめ、定聚のくらいにいれしめよ、とある如き文句ばかりでなく、請救致敬悉く其の儘である。古來靈告直接の感得によりて結び付けられたる聖德太子と親鸞聖人の關係が、其直接見聞述作せられたる文字の上より一致を見出さるゝ次第である。磯長廟に於ける六句の偈、六角堂の參籠といふ如き、神秘不思議の感得が、勝鬘經と教行信證の上に宛然として符合を見出さるゝ次第である。是即ち文字を讀まれたのではない、墨で書かれたのではない、何れも内心實驗の泉より流れ出てたる同一鹹味である。宜なるかな聖德太子と親鸞聖人と、其の化儀を一にして、非僧非俗在家同事の有様であることである。併し決して神秘なる事實を證明せんと試みたり、外儀の符合を整へたりすることが決して兩聖の御本意ではない。内心實驗の如來大悲の眞實信心が一つである。さればこそ聖



人は堂々として、上宮皇子方便し、和國の有情をあはれみて、如來の悲願を弘宣せり、慶喜奉讃せしむべしと仰せられたのである、聖德太子御一代の佛法は、如來の悲願である、南無佛である、南無阿彌陀佛である。聖德太子の勝鬘經にあらはれたる理想を憧憬されたる親鸞聖人が、遂に法然聖人の教によりて實現された結果が、親鸞聖人の信仰である、念佛成佛は眞宗である、教行信證である。されば勝鬘經の一乘釋を見るときに、破顔微笑を禁じ得ないものがある。

大乘者即是佛乘、是故三乘即是一乘、得一乘者得阿耨多羅三藐三菩提、阿耨多羅三藐三菩提者、即是涅槃界、涅槃界者即是如來法身、得究竟法身者則究竟一乘、無異如來、無異法身、如來即是法身、得究竟法身者則究竟一乘、究竟者即是無邊不斷、是勝鬘經の精神たる大乘である、一乘である。大乘相應功德地と云はれたるも、日域大乘相應地といふも、皆此大乘である。次に引續きて三寶歸敬が擧げてあ

するといふも、究竟の歸依に非ず、有限の歸依なり、故に如來に歸依したてまつる唯一の歸依をすゝめたまふ。曰く

若有二乘生、如來調伏歸依如來、得法律澤、生信樂、心歸依法僧、是二歸依、非此二歸依、是歸依如來、歸依第一義者、是歸依如來、此二歸依第一義是究竟歸依如來。

何以故無異如來、無異二歸依如來、即三歸依、何以故說一乘道、如來四無所畏成就師子吼說、若如來隨彼所欲、而方便說、即是大乘無有二乘、二乘者入於一乘、一乘者即是第一義乘。

是全く信樂開發である。如來に調伏せられて如來に歸依し奉り、法の律澤を得て信樂の心を生ずといふは、如何にも至心信樂己を忘れて願海に歸入する有様である。律澤とは如何に麗はしく貴き文字である。全體律とか法とかいふ文字は、所謂律法主義の意義に、陥り安きものである。しかるに律澤とか法喜とかいふ

四  
る。是即ち聖德太子の生命たる、否佛法の根本たる、篤敬三寶である。第一に佛寶を歎じて曰く、

世尊如來、無有限齊時住、如來應等正覺、後際等住、如來無限齊、大悲亦無限齊、安慰世間、無限大悲、無限安、慰世間、作是說、是名善說、如來。若復說、言無盡法、常住法、一切世間之所歸依者、亦名善說、如來、是故於未度世間無依世間、與後際等作無盡歸依。

嗚呼如來は無邊の如來にてまします、無限の如來にてまします。無限無邊の如來にてましますゆへに、無限の大悲を以て、無限に世間を安慰したまふ、是眞に善く如來を説きたてまつるなりと。嗚呼此如來ましますんば、いかで我等無限に安んずることを得ん。願力無窮にましますば、罪業深重もちもからず、佛智無邊にましますば、散亂放逸もすてられず。此の如き盡十方無碍光の如來に歸依したてまつる、亦無盡の歸依といふべきである。法に歸依するといふも、僧に歸依

ときは、全く法悅愛樂の風光を運び來るのである。況んや信樂の心を生ずとあれば、親鸞聖人の眞精神が宛然として實現したまひてある。大乘は二乗あることなし、一乘に入らしめんとし、一乘は第一義乘なりとあるに至りては、『教行信證』行卷の一乘海の親鸞聖人の御自釋を擧げずには居られぬのである。曰く

言一乘海者、一乘者大乘、大乘佛乘、得一乘者得阿耨多羅三藐三菩提、阿耨菩提、即是涅槃界、涅槃界者、即是究竟法身、得究竟法身者則究竟一乘、無異如來、無異法身、如來即法身、究竟一乘者即無邊不斷、大乘無有二乘三乘、二乘三乘者入於一乘、一乘者即第一義乘、唯是誓願一佛乘也

親鸞聖人が法然聖人の選擇集をいたされたる信仰の告白とも謂ふべき『教行信證』の行卷に、選擇本願念佛集曰南無阿彌陀佛往生之業念佛爲本と、三選の文のみを擧げられたるのみにて、悉く之に包容されたるを見れば、明らかに此第一乘海の御自釋に、勝鬘經の本文を



直に用ゐられたるは、畢竟同工同筆の意味たることを感ずる次第である。是實に日域大乘相應地の大乗は、唯是誓願一佛乗であるのみである。而して涅槃經の大乗も、眞實も、實諦も、華嚴經の無碍道も、信樂も、信心歡喜無疑者も、唯此念佛無碍の誓願一佛乗であるといふ鍵鑰は、たしかに此勝鬘經であることを確信する次第である。法然聖人の選擇本願によりて、淨土門のすべての聖教を實驗されたる親鸞聖人は、聖徳太子の日域大乘相應地によりて、釋尊一代の大乗教典を人生上に體讀實驗されたのである。其記録が即「教行信證」である。聖人の教は文字を以て讀むのではない、士農工商各其生活を以て之を實驗するのである。其實驗が二種の廻向である、淨土眞宗である。聖人讀して曰く、

多生曠劫この世まで、  
あはれみかふれるこのみなり  
一心歸命たへずして、

奉讀ひまなくこのむべし。  
聖徳皇のおあはれみに、  
護持養育たへずして、  
如來二種の廻向に、  
すゝめいれしめおはします。  
こは勝鬘經の根本につきて所感の一端を告白したゞけである。根本既に此の如くなれば、全部亦之に外ならぬのである。我等は深く其實驗の源泉を汲みたいと思ふのである。

佛閣基固遙及梅但梨耶之三會。法水流遠普潤六趣四生之群萌。

# 「教行信證」信卷講話

近角常觀

## 第十席 横超釋

### 一 横超斷四流の文

言横超斷四流者、横超者、横者對豎超豎出超者對迂對廻之言。豎超者大乘眞實之教也、豎出者大乘權方便之教、二乘三乘迂廻之教也、横超者即願成就一實圓滿之眞教眞宗是也、亦復有横出即三輩九品定散之教化土懈慢迂廻之善也。大願清淨報土不云品位階次一念須叟頃速疾超證無上正眞道故曰横超也。今席は横超斷四流の處であります。即ち善導大師の「玄義分」の言葉に就ての示してあります。こは「信卷」前年度の講本末に於て拜讀した所の御文に、三

心即ち一心である、一心即ち金剛眞心であることが言はれてあつて、その御文は斯うであります。  
信に知ぬ、至心信樂欲生、其の言は異なりと雖、其の意惟れ一なり。何を以ての故に、三心已に疑蓋雜はること無し、故に眞實の一心是を金剛の眞心と名く。金剛の眞心是を眞實の信心と名く。  
而してこの金剛眞心に就て、今年度第一席にてお話した所に於て、全體菩提心に二種あると仰せられ、然るに菩提心に就て二種あり。一には豎、二には横なり。又豎に就て復二種有り、一には豎超、二には横出なり。豎出豎超は權實顯密大少の數を明せり。歷劫迂廻の菩提心なり。自力の金剛心、菩薩の小心なり。亦横に就て復二種有り。一には横超、二には横出なり。横出とは正雜定散他力中の自力の菩提心



なり。横超とは斯れ乃ち願力廻向の信樂なり。是を願作佛心と曰ふ。願作佛心は即是れ横の大菩提心なり。是を横超の金剛心と名くるなり。

この金剛の一心は、之れを開發すると横に四流を超越する横超の金剛心であると、横超斷四流の廣大のち力であることをお知らせ下された。之が横超他方の言葉の出たもとであります。そこで今此の御文によつても分る如く、全體菩提心に横と堅との二つがあつて、其の堅に於ても堅超堅出の二つがある。要するに自分の自力で修行して、堅に悟りに到る自力聖道の教えが堅である。處が横とは佛の廣大なる恵みて横に淨土に到らせて貰ふ淨土門の教であるが、それにも横出横超の二があつて、横出は自分の稱へる念佛の力で往かして貰ふと言ふ他力中の自力の教である。處が今我々の頂く願力廻向の眞宗は、横に五惡趣を飛び超える横超他力の教へてであると。茲等の處が最も眞宗の眞宗たる有難い處である。私の常に言ふ眞宗のおみのりの奥底はこの横超他力の味ひの外に無い。道る頼無さお慈悲一つで、横に四流を超越すると、前の煩惱の生縛をかりりと切り断ちて、迷の根切れをさして貰ふ處が、最

も難有いのであります。

## 二 一實圓滿の眞教

そこで直に御文にある通り、横超とは、横とは堅に對する言である。堅は私共がこの世に居て佛に成る處の教が堅である。此の世に居てこの身で悟りに進む教であります。又横は私共迷ひの者が、佛の廣大なるお照し御導びきを蒙りて、佛のお慈悲で横に淨土に參らして貰ふ教へである。故に堅は自力門、横は淨土門となる。處で今言ふ如く、それに各超出の二があつて堅超は同じ自力門でも、娑婆即寂光土など、此世で頓に此身が悟りに飛び超える傍の教である。又堅出は三僧祇百大劫の修行を経て、漸々に悟に進む方の傍である。結まりは自力の早さと遲さとであります。次に横にありてもそこにゆくと、横超は廣大な御慈悲を頂く一念に、先き言ふ如く忽ち四流を超越させて頂く本願他力の教であるが、同じ横の淨土門中にも、自分の稱へる念佛の功力の多少によつて淨土に參らして貰ふといふは、口には念佛は稱えて居ても矢張り自力で修行して行くと同じである。即ち方便門の教である。故

にこれは横出であると、先づ初めに斯く堅出堅超横出横超のあることをお示し下されたのであります。而してその

『堅超とは大乘眞實の教なり、堅出とは大乘權方便の教なり。二乘三乘迂廻の教なり。』

堅超は大乘の眞實の教であり、堅出は同じ大乘の中でも權方便の權の教である、二乘三乘の聲聞緣覺菩薩の、迂り遠く段々に證りに往く迂廻の教であると。こは先づ自力教の分類と頂いてよいのであります。肝腎は次の横超のお示しにある。即ち先きより言ふ、私共このじぶとき御同やうが、お見捨て無き御慈悲の爲に、頂く一念に横に四流を飛び超えさせて貰ふといふ味ひである。茲を能く聽いて欲しいのであります。即ち次には、

『横超とは即ち願成就したまへる一實圓滿の眞教眞宗是れなり。』

これが古來名高きお言葉である。「横超とは願成就したまへる」とは、願成就文に

其の名號を聞いて信心歡喜し、乃至一念せん。至心に廻向したまへり。彼の國に生れんと願すれば、即

ち往生を得不退轉に住す。

と。斯く本願御成就の上より、彌々此の者を助けると、廣大な御眞實でお向ひ下された一實圓滿の眞のお慈悲、即ち淨土眞宗是れであるとのお言葉である。即ち如何なる者も一度び此のお慈悲に接すれば、信心歡喜し乃至一念して、如何な罪深き腹底迄も、届かぬ隅無く御眞實が入り満ちて下さる眞のお慈悲、眞宗是れであるとのお示しであります。こは心の隅々迄も一實圓滿して入り満ちて下さると云ふは、私共が仕やうの無い心の上へ、お慈悲を引きかぶせるやうに「此の儘ながらのお助け」と氣休めをすることも無ければ、「こんな者でもお助け」と、空にお慈悲を持つて來て、我と我が心を押えつることで無い。所謂

佛の本願力を觀そなはずに、遇うて空しく過る者無し。能く速に功德の大寶海を満足せしむ。

で、如何なる者でも、設え針の先き程でもこのお見捨て無い思召に氣が就いた時には、其の御眞實の爲め有らゆる胸のちやくやも融かされ、満たされて、その偉大なるお心の爲め、腹一杯満足せしめられずには居られなくなるのがこのお慈悲の頂けた味ひである。故に



その然うして下さる佛の眞のみ教へ、即ち眞宗是であるとの仰せてあります。こは又『和讃』のお示しに

本願圓頓一乘は、  
逆惡攝すと信知して  
煩惱菩提體無二と、  
すみやかにとくまざらむ。

とあつて、逆惡を飽く迄お見捨て無き御親切である爲に、一言それを知らされるなり、如何な逆惡の私も畏入り、煩惱の有る限り、それ丈け腹一杯充分に頂かずには居られなくなるのがこの本願圓頓一乘の教へである。

又『政那鈔』のお示しには、  
しかれば凡夫不成の迷情に、令諸衆生の佛智満入して、不成の迷心を他力より成就して、願入彌陀界の往生の正業成するときは、能發一念喜愛心とも、不斷煩惱得涅槃とも、入正定聚之數とも、住不退轉とし聖人釋しましませり。これすなはち即得往生の時分なり。此一念にやぶれて五蘊所成の肉身いまだやぶれずといへども、生死流轉の本源をつなく自力の迷情、共發金剛心の一念にやぶれて、知識傳持の佛語に歸屬するをこそ、自力をすて、他力に歸するともなづけ、また即得往生ともならひはんべれ。  
とあつて、斯く頂く一念に廣大の佛智が私の心中に満

入して下され、悪い心が其の儘佛の大慈悲心と變る處が、

本願力にあひぬれば、  
空しくすぐるひとぞなき  
功德の寶海みち／＼と、  
煩惱の濁水へだてなし。  
とある處の味ひであります。て先き程も思ふたのであるが、婦人が物置きへ探し物に行かれる時、物置きの隅々迄光が通りて明るく見えぬ時には仕やうが無い。佛のお慈悲はその如く、私の暗い心の隅々迄遣らず光を通して、如何なる暗き部分をも剩さず照し盡くさうとある遣る瀬無き眞實心にてましますのである。故に其のお心が頂ける一念、心の底の底迄徹到して、腹一杯お慈悲が満ち充ちて下さる處が實に難有いのであります。

『亦復横出有り。即ち三輩九品定散の教、化土懈慢迂廻の善なり。』  
横出は横にそろ／＼と出て行く迂廻の善である。彌陀の本願は今言ふ如く、圓入圓滿頓極速と、一邊に飛び超えさせて貰ふお慈悲の至極であるが、同じ浄土門中に於てもその佛の廣大な名號を此方で稱え、此方て修する、此方の修行の多少といふ事が這入つて来る

時には、はや往生に上中下の三輩九品の別が現はれて来る。殊に臨終の時に於ける來迎の様に迄區別があるといふ事にさへなつて来るのである。その然うなるは同じ他力を言うてながらも、夫れを頂く此方の手前に自力が加はつて来るからであります。てこれて參らして貰ふ浄土には、此方の根機の勝劣に従つて、浄土にも三輩九品の別が現はれて来る。即ち眞の佛土で無くして、方便化土である。又懈慢は、斯く此方の修行の深淺がどこ迄も目につくといふは、まだ自分は一角善く出来るといふ高上り仕た考があるからである。故にその善い氣で猶ほ幾らか善が出来る積りて、落付いて居る處が懈慢である故にこの化土懈慢迂廻の善では同じ横中ても横出である。との仰せてあります。

### 三 一念須更のあいだに

次に

『大願清淨の報土には、品位階次を云はず、一念須臾の頃に、速に疾く無上正眞道を超證す。故に横超と曰ふなり。』

は、大願清淨の報土とは、今廣大の本願より報ひ現は

れさせられた眞の佛土故報土である。そのお見捨て無き思召一つより表はれ現れて、私共を洩れなく救ひ取りたいとある清淨眞實の眞の佛土にありては、品位階次の區別が無い。三輩九品の別も無く、善人悪人男女尊卑の分ち無く、皆齋しく「一念須臾の頃に、速に疾く無上正眞道を超證す」即ちたつた一念の間にてある。即ち「この淺間しきを捨てぬ」「惡しければ惡しき丈け彌々哀はれて見放せぬ」との遣る瀬無き大悲のお心を聴かして貰ふなり、一念須臾の間に無上正眞道といふ、廣大な佛の道を、身に一飛に得させて頂くお慈悲であるとのお言葉である。親鸞聖人はこの一念をお示し下さる處になると、仰せが實に際どいのであります。現にこの『信卷』下巻初の第六席で申した處の御文には、

一念とは斯れ信樂開發の時刻の極促を顯はし、廣大難思の慶心を彰はすなり。

とのお言葉もあつて、一念とは僅かひと思ひの暇である。けれどもこの惡しきをお見捨て無き大悲の御心が聞える時には、その一思ひの間に頓極頓速と「一念須臾の頃に速疾に無上正眞道を超證する」即ち斯る私如



きをお見捨て無き廣大の思召であつたか難有や」と、その佛の眞實が私の心に映つて下さるなり、電の閃く暇にこの淺間しき私の胸底を貫き、満心慈悲ばかりと入り満ちて、須臾の頃まじなに忽ち無上正眞道といふ廣大な證の境界に到る可き身と、轉じかへさせて頂く處のお慈悲であるとお知らせである。故に、それであるから即ち横超と云ふと。これは現に皆様が慈悲を頂かれる有様を見ても然うである。佛の遣る瀬無き御眞實が一念此方の心に分るなり、皆様が皆な打つて換つて、際を立て、お喜びになるのであります。併しながら玆に氣を着けんならぬ事は、斯く言へばとて決して頂く處の時廻や、心の有様が一轉し來る處に目をつけるのては無い。肝腎の向ふ様の大慈悲の御心を頂かして貰ふ一つである。弓の矢の飛ぶは、飛ぶところの矢に速かなる力があるので無い。非常な力で引き絞つた矢である所から、一念須臾の力が矢に現はれて來るのである。然るに兎角矢の早い處にのみ眼をつけて可かぬのであります。そこで力の源は即ち佛の誓願不思議の弓である。如何なる罪惡の淺間しきをも、必ず射通し、助けずは措かぬとの如來の誓願力の弓である。法然聖人の

仰せには、一切の諸佛に夫れ、願は澤山あるけれども、誓ひの附いてある願は無。諸佛には夫れ、斯く仕て遣り度いと願はあるけれども、必ず斯くせねば置かぬとの誓ひが無い然るに今阿彌陀佛には夫れがある。「必ず斯くして救ふて遣らねば置かぬ。救はれぬ時にも我も佛とは成るまい」と。御自身の正覺を暗けものになされて迄の、飽く迄も見捨て無き御眞實である。世の中に金を遣り度いと迄考えて呉れる金持はあるけれども「有り」とある我が金を残らず與へて、夫れが與へられぬ時には我も金持とは言はれまい。苟も金持とあるからは、設え何んな事を仕ても、何處々々迄も尋ね廻はりて、この金を與へ遂げずには措くまい、全體もとくと與へる爲に積み上げた金である」といふ金持に到りては類が無いのである。即ち有りである十方衆生、如何な濫とき者をも必ず我が眞實で温め融し、満足と與へ遂げずば、我も正覺を取るまい。との難有き誓ひが根底となつて、起こさせられた廣大の本願であります。而してそのお心の下より現はれて、その願成就して阿彌陀佛とは現はれ下された。即ち阿彌陀佛のお姿といふものが、もとく救はな置かぬ

私共一人々々に向はせられての廣大な御眞實心の外に無いのである。故にその飽く迄佛の方より見放し無御眞實心の故に、

若不生者のちかひゆへ、信樂まことにときいたり一念慶喜するひとは、往生かならず定りぬ。である。又法然聖人より親鸞聖人へ御附屬の文で頂けば、

若し我佛を成らん、十方の衆生我が名號を稱して、下十聲に至らん。若し生れずば正覺を取らず。斯く誓はせられた佛が

彼の佛今現在に成佛したまへり。その佛が今現に成佛して、阿彌陀佛とはなりて現はれ下されてある。即ち今かくと足ずりしてお待ち下されてある。立攝足行の今のお姿は、若不生者の遣る瀬無い思召から、私共一人々々を廣大の哀れみのお心で眺めて居て下さるお姿に外ならぬのである。故に當に知るべし、本誓重願虚しからず、衆生稱念ずれば必ず往生を得。

と、終に斯の佛の御眞實の爲めに、促がされ、催うされ、とうど濫とい私もその何處迄も呆れの無いお實

意の爲めに、敗かされ降參し畏入りて「若不生者の誓ひ故、信樂まことに時いたり、一念慶喜する人は、往生かならず定まりぬ」である。即ち玆のお慈悲の届いて下さる所の有様が「一念須臾の頃に」であります。

#### 四 平生業成

そこで私として申さねばならぬ事は、私は苦しんで頂いたもの故、いつも苦しみに突き當りて氣づかして貰ふた話が勝つて居る。又そこへ持つて行つて話した方が、御了解を得る上にも話しよいのであります。併しながらこのお慈悲を頂くには、そこ迄突き當らなければ分らぬといふ、そんななまぬいお慈悲では無いのである。夫れならば平生業成とは言はぬのである。處がお慈悲頂くは、平生業成であるといふは、私共が未だ佛とも法とも思はず、横の方に向つてせつせと進んで居る處に、思ひ懸けなく佛の方より、廣大のお慈悲でチヨキンと攫まれて仕舞ふのであるから、それが即ち平生業成である。佛のお慈悲は、私共が人生の痛苦に行き惱むを待つて、それからそろく救ふて下さるといふ如き、そんな愚圖々々したお慈悲では無いの



てあります。而して夫れは何うかと言ふに、設へば道樂者が有つて金を使ふに、我々人間にする時は、その彌々使ひ盡くして仕やうが無くなるを待つて、「夫れ見よ」と言うていくことになる。處が今佛のお慈悲はその仕やうなくなる迄放つて置けと言ふ如き、そんな氣樂な親心では無い。道樂息子の方では親の親切に心配して下さるのを却てうるさがり、遁げ隠れて使つて居る。「まだ金は残つて居る。まだそんなに急に死ぬこともあるまい」と、一日々々善い氣で金使ひを仕て居る處に、「汝、そのやうな事を思うて居るが、そんなものを方に仕て居るのが間違ひである。我は汝が性分として、そのやうな迷妄より、眼を醒まさうにも醒ましえざる處が如何にも可哀相で、五劫の思惟も永劫の修行も、十劫已來の待ち兼ねも、皆なその汝が哀はれて見放し得無い一念からである。我はこれ程迄にして待ち待つて居るに、汝は「まだ當分よからう彌々行き詰た時は」などと、猶ほ餘裕あることを思うて居るのであるが、そのそんなことを言ふて居る、汝を見て居る親の身にもなつて呉れ。親は汝のそんな餘裕ある氣で居る處が彌々哀れて見て居られぬのである。」と。斯く思

ひ懸け無く言はるゝ故に、如何程が此方が餘裕ある積りて居ても、其の親心の飽く迄深きに打明かされ、畏入つて頂かざるを得ぬのであります。故にこの親心の上下より言ふ時は、苦しまずに居る者程よけ可哀相に思召し下さるのである。吞氣な心で居る者程彌々遣る瀬無く御憐み下さるのである。道樂して行き詰り、難義しける者も可哀相であるが、まだ行き詰まることも知らず、善い氣でやつて居る者は猶ほ哀はれてならぬのである。御同やうに此の仰せてあることに氣がつかぬ間は一念の時はいつあるか、とて、どうもはつきり頂かれ無いのであるが、それが決して遠きにあるので無い。今現に大悲の御親はこの思召で私共一人々々に向つて、下さる御眞實である。このことを今現に善知識の口をかりてお聞かせに預つて居るのであることに氣がつけば、其の一念に

善知識の言葉の下に歸命の一念を發得せば、その時をもて娑婆のをはり、臨時とおもふべし。

それが即ち一念の時である。而してその一念に人生を飛び超えて「無上正眞道を超證す故に之を横超と曰ふ」と。のお知らせであります。

### 五 超發無上殊勝願

さて次には  
大本言超發無上殊勝之願

どうも私共この「無上殊勝の願を超發す」などの言葉を、軽く言ふ弊がありて可かぬのであります。何故無上殊勝の願であるかと言ふに、善い者を善く仕て下さるが當り前であるに、こは善くない者が哀はれとある、茲が彌陀の本願の御不思議である。その不思議の御本願を彌陀佛が超發とは、即ち今言ふ一切の諸佛が、善い者を善く仕て遣らうとの御哀れみが寧ろ當り前である處に、彌陀佛のは私のこの善く出來ざる、惡の止まざる所が哀はれとある廣大の思召である。當り前の薬では最早やどの薬用ゐても間に合はぬ。その何れの薬でもいかぬ者に、茲に特別の薬でこの飛び超えた思ひ立ち故、即ち超發であります。即ち今私共頂くことが出來るといふは、この飛び超えた御哀憐からの、この特別の薬故頂かずに居られぬのである。お慈悲の方からこの格を破つた無上殊勝の慈愛で向はれるから、いかにしづとき私の心中にも、終に畏入つて其廣大なお心が

來すには居らぬといふことになるのであります。それで私共動ともすると、この一念徹底の心持ちを、禪の悟りも餘り變はらぬ心境があるかなど、思ひ易いのであるが、茲ははつきり明かに仕て置かねばならぬ。此他力信仰の味ひは決してそんな、忽然として闇み晴れたといふ如き心持ちでは無いのである。此方は久遠劫來お慈悲に逆ひ、仕て來たのであるが、その逆ふ性が哀はれ、幾萬度び、即ち今の無上殊勝の思召で長々の間廣大の御眞實で、向ひ通しに仕て下された御親切であつた爲め、終にその長の御實意の故に、此方の我慢が破れ、畏入つてこの罪深き奴が、御眞實一つに腹ふくらせて貰ふた味ひであるのである。故に茲は何處迄も肝腎は御眞實一つである。闇みは其の御眞實の故にひとり取り去られるのであります。次に又

又言我建超世願必至無上道名聲超十方究竟所聞誓不成正覺

我この超世の大願を建てたからには、必ず無上道に至り、我が救ひの名乗り、即ち南無阿彌陀佛の呼聲が、十方有りとおある世界に超え響いて「究竟して聞ゆる所



なくば」——即ち十方衆生の心の眞底迄飽く迄徹底的に聞こえさしむる處無くば、「誓ふ正覺を成らし」ては遣る瀬無き佛の御誓ひのお言葉であります。

## 六 横截五惡趣 惡趣自然閉

又次には

又言、必得超絶去往生安養國横截五惡趣惡趣自然閉昇道無窮極易往而無人其國不逆違自然之所牽已上

こは私共は當然地獄に墮ちて行かんならぬのを、この遣る瀬無きお慈悲で方角を一轉させられ、「超絶して去つて安養國に往生する」のである。私共は當然五惡趣に墮つべきが當り前であるに、この思ひ懸け無きお慈悲で横に五惡趣を截り斷つて仕舞はれるのであります。こはもつと人生的に言ふと、私共常日頃五分々々で、人生に「濟む濟まぬ」、善し惡しの争ひを仕て居る。其處へ思ひ懸けなく横合より佛が飛んで来て「汝はそれは何を仕て居るのであるか、何時迄も汝が迷ひの喧嘩を續けて居る様が、如何にも哀はれて見て居られぬ。

であるから、終に地獄行きの方が、引くりかへされて淨土に參らせて貰ふのである。私共既に五道六道といへる惡趣に墮ち込む以外に道無くなつて居る者を、茲に思ひ懸け無く願力の不思議として、其の道を自然に塞ぎ、廣大のお慈悲に引き寄せて下さるのである。その夫れ迄にして下さるは何かと言ふに、それが即ち「其の墮つる者が哀はれ捨てられぬ」との、不可思議眞實の御親の御親心に外ならぬのであります。而して「道に昇るに窮極無し」——惡趣を塞るゝ計りか、一度びその親心に満足されて見ると、夫れから夫れへと何處迄善く仕て下される御眞實であるか、窮りが無い。「往き易くして而も人無し」——斯の如く此方は他く迄迷ひに迷うて居るのを、向ふ様から救はずには居られぬとの御眞實を以て向つて下さる御慈悲である。さすれば是れ程心易く、是れ程往き易きは無いに、それがこの廣大の思召であることがなが／＼分ら無い。分ら無いのは餘りに破格の御親切である爲め、自分の根性にこだはつて、そんな偉大な御親切が有り得やうかとの自分の思ひがぶち破れぬからであります。「其の國逆違せず、自然の牽く所なり」——併しこのお慈悲には如何

ぬ。イヤそれでもあんまり残念で黙つて居られぬと言ふのか、そんなことは言はいても、我は疾くから知つて居る」と、斯く何處へ／＼迄も親切に言はるゝ時は、最早や「けれども」と反す言葉が無くなつて来る。「ハテ不思議だな」と思ふなり「成る程これが兼ねてより大悲眞實の仰せてあつたか」と、初めて向ふ様の思召を氣づかして貰ひ、腹一杯頂く一念、はやいつの間にか今迄の五分々々根性を畏れ入りて、即ち五分々々の根性の根が截れてある。即ち思はざる御眞實が向ふ様より来て下さる故に、横に五惡趣を斷ち截られて仕舞ふのであります。而して「横に五惡趣を截り、惡趣自然に閉づ」——自然は私共の言ふ自然で無い。佛の廣大のお慈悲から来る自然である。總て物の地に向つて落つるは、地に下へ引き着くる引力があるからである。同じく私共の五惡趣を截られ、惡趣を塞がるゝは、この思ひ懸け無き願力であるから、願力の故に自然なのであります。こは『和讃』の告示には

信は願より生ずれば、念佛成佛自然なり、

自然はすなはち報土なり、證大涅槃うたがはず。

遣る瀬無きお慈悲で何處へ／＼迄も引張つて下さるの

なことあつても、間違ふといふことは無い。何故間違はぬか、間違へては居られぬとのこの向ふ様が眞實心を以てかゝつて下された仕事であるから、間違はうやうが無いのである。必ず牽き寄せて下さるのであります。そこで斯く段々頂き来る時は、要する所この墮ちるより仕やうの無い者を、墮して仕舞つては自分が在るに在られぬとの、不可思議眞實の願力の手強さ、即ち之が他力である。然るに皆んなは此の他力の飽く迄深きを頂かずして、何故にこんな罪重い者が浮かべるのであるかなど、浮べるは浮ばず船があるからであると言は無くしてはならぬ。反す／＼も私共今現に歩々墮ちつゝある身を、墮しては自分の方が持ち切れぬと、飽く迄も見捨てなき、難度海を渡さうとの無碍の大船であることを頂かならぬのであります。次には、

大阿彌陀經言可得超絶去往生阿彌陀佛國横截於五惡道自然閉塞昇道之無極易往無有人其國土不逆違自然之隨牽已上

こは今の大經の文を、異譯の經によりて告示下されたのである。即ち今の廣大のお力の故に、自然に引



き寄せて下さる同じ處の御文であります。猶ほ講本があと大分残つて居る。時間が無いからあと一口に話させて貰はふと思ふ。總て今席の所は、今の五分々々て私共が人と喧嘩仕て居る。其の奴が思ひがけなく慈悲に喧嘩を取られて、五分々々の根が切れる處をお知らせ下されたのである。私共の「善し悪し」「濟む濟まぬ」の念が廣大の御眞實に打明かされた一念、謝り果て、その迷の根本を断れる處を指示下されたのである。即ち私共がこの廣大のお慈悲により、人生の五分々々の見地から脱れさせて貰へる處である。「あゝ如何にも悪い私であつた」と、今迄の迷ひから手を放させて貰へる處であります。

## 七 断字の意義

次に

言断者發起往相一心故無生而當受生無趣  
而更應到趣已六趣四生因亡果滅故即頓断  
絶三有生身故曰断也四流者則四暴流又生  
老病死也。

には、如何なる者も、「往相の一心を發起するが故に、生として當に受くべきの生無く、趣として更なるべき趣無し」である。「已に六趣四生の因亡し、果滅す」——何故ならば全體五分々々根性で、何時々々迄もくついで行くから、五惡趣に墮ちるのである。然るに今斯く廣大のお慈悲の力で、頂く一念、その六趣四生の因であり果である、五分々々根性を滅されて仕舞ふから、即ち最早や生として受く可きの生無く、趣として到る可き趣が無い。「故に即ち頓に三有生を断絶す」と、我々が生れ代はり死に代はりの、流轉生死の業因を断ち切られて仕舞ふのであるから、故に即ち断と言ふのである。こは即ち横超断四流の断の字の意義をお知らせ下されたのであります。而して其の断たれて仕舞ふ四流とは何か、といふことになりて、「四流とは則ち四暴流なり、又生老病死なり」——こは直ぐ後の處に『涅槃經』の文を引きて、四流とは欲暴、有暴、見暴、無明暴の四つであることが言はれてある。又生老病死の四つのことであるとの仰せである。要するに生れて死ぬ迄人間一代、種々に繰返す無明煩惱の事でありませぬ。次に大本言會當成佛道廣度生死流又言會當作

私共は長々の間執着心から離れることが出来ぬて、苦んで居るのである。善ければ善いに就け、其の上々々と、種々なる不足不満の念が起つて来る。爾るに今大悲の眞實は、私が斯く何處迄も満足仕されざる心中、——この飽く迄飽くを知らざる性分を知ろしめして、哀はれと廣大の御眞實を以て向つて、下さる御親切と、一念この思召に氣が就けば、「如何にも不足の止まなんだ處が最も悪い骨頂であつたと、其思召に満足さるゝ處から、はやいつの間にか放し難き執着から手が放せるとなるのである。又今迄自分が悪い自分分が濟まぬと、自分の申譯け無さに泣いて居る者も「今迄自分の仕やう次第で、自力で償なへるものゝ如く思つて居たが、身の程知らずの間違ひであつた」と、その一念には償ひ得ざる自分であることを知らされて、お慈悲一つに満足する處から、ひとりて今迄の我慢から手が放せるとなるのである。即ち善きにつけ悪しさに就け、この廣大なる御眞實は、私が無明の根本たるこの五分々々根性に向つて之を洞察し、之を心配し、その者故見捨てられぬとの、茲に意外なる思召にてまします故、一度びこの御眞實に出遇はせて貰ふた一念

世尊將度一切生老死已上

こは斯く『大經』にもお説き下されてあると、直きく『大經』の御文を挙げ、今の四流をば超断させて下さるお慈悲であることをお知らせ下されたのである。申す迄も無いのであります。又次には、

涅槃經言又涅槃者名爲洲渚何以故四大暴河不能漂故何等爲四一者欲暴二者有暴三者見暴四無明暴是故涅槃名爲洲渚已上

涅槃は洲渚として、「みぎは」の如き境地である。何故ならば四大の暴河が如何に漲つても、之を漂はすことが出来ぬ。隅田河が如何に氾濫しても、佃島も流すことは出来ぬのである。而して其の河は何かとあつて、今いふ欲暴、有暴、見暴、無明暴の四つであると、こは詰まり人間の迷ひの病原をこの四つに分類したのである。今廣大の眞實で攝取された横超の一念は、即ちこの迷ひの根本を断つて頂いたのであるから、四大の暴河が如何に心中に荒るゝ事ありても、之を漂はすことは出来ぬと、こは横超の味を廣大なる涅槃の境界からお示し下されたのであります。



## 八 前念命終、後念即生

又次ぎには、

光明寺和尚云、白諸行者、凡夫生死不可貪而不厭、彌陀淨土不可輕而不忻、厭則娑婆永隔、忻則淨土常居、隔則六道因亡、輪回之果自滅、因果既亡、則形名頓絕也。

こはこの生死の人生を、いつまでも貪つて、厭はぬのは善く無い。この世は飽く迄厭はならぬ。又彌陀の淨土を聞いても、軽く思つて虚しく仕ては仕やうが無い。厭へば則娑婆永く隔たり、忻べば則ち淨土常に居せり。て、この慈悲頂けば、頂く一念に、

超世の悲願さしより、われらは生死の凡夫かは、有漏の穢身は變はらねど、心は淨土にすみあそぶ。

と、この世から廣大の淨土が胸中に現はれ出て下さるのである。すると隔れば六道の因亡し、輪回の果自ら滅す。て、其の一念に迷ひの因果が忽ち亡くされて仕舞ふ。併しこの世を厭ひ隔てるは、他力の上では初めからこの心が私共の上に出て来るのでは無い。遣る瀬

無き佛の仰せが聞えるから、「初めて、この世は當てにならぬ」となつて来るのである。即ち人生相手に五分々々の喧嘩の外道無つた者が、思ひがけなく慈悲に喧嘩を取られて仕舞ふから、もう人生相手に出来ぬやうにされて仕舞ふのである。而して斯く一度び迷ひの因果を亡ぼされて見ると、則形と名と頓に絶ゆるをや——迷ひの身も名も共に無くなつてしまふ譯けてあるとのお知らせである。而してこれが死後極樂に參つてからの事である。信の一念に此世から斯く迷ひの根本を根絶して下さる處が、因亡し果滅すとある味ひであります。

又曰、仰願一切往生人等、善自思慮、己能、今身願生彼國者、行住坐臥、必須勵心、尅己晝夜、莫廢畢命爲期、上在一形、似如少苦、前念命終、後念即生彼國、長時永劫、常受無爲法樂、乃至成佛、不遲生死、豈非快哉、應知、已上。

「善く自ら己れが能を思慮せよ」——皆んなが各自に自分程偉い者は無いと思ふるのであるが、善く自分の能力を考へて見て、何處迄も捨てぬぞとある佛の能

力を頂くがよい。全體皆ながこの御眞實に向つて彼是れ文句が出て来るは、

汝一心正念にして直に來れ、我能く汝を護らん。と仰せられ、又「佛の本願力を觀そなはずに、遇ふて空しく過る者なし、能く速に功德の大寶海を満足せしむ。」とある佛の能くのお力が聞けぬからである。一度びこの飽く迄「救ひ能ふ」、「助け能ふ」の、佛の遣る瀬無き能くの御眞實なることが、心に分つて見ると、衆生貪瞋煩惱中、能生清淨願往生心

で、貪瞋煩惱のこの穢き心の中に、意外にも能く「思召しの難有や」と喜ぶ清淨願往生心が起つて来る。又『正信偈』には

能く一念喜愛の心を發しぬれば、煩惱を斷ぜずして涅槃を得。

とのお知らせもあります。故に「今身に彼の國に生れんと願はん者は」——この御眞實を聞いて、彼の佛國に生れんと思ふ者は、「行住坐臥必ず須く心を勵し、己を尅して、晝夜に廢すること莫るべし。」——一度びこの慈悲に夜の明けた者は、南無阿彌陀佛々々々行住坐臥に心を勵し、己を尅して、——尅しては尅苦す

ること、尅むことである。即ち自分はもう頂けたからとて放つて置くて無しに、矢張り何處迄も身の惡しきを畏れ入つて、南無阿彌陀佛々々と、廣大のお心を喜ばせて貰ふ有様であります。「畢命を期と爲し上一形に在るは、少しき苦に似たれども」——世に在る限りは一生の間喜ぶと言ふは、多少勞苦のやうにはあるけれども、「前念に命終し、後念に即彼の國に生じて」——これは元來善導大師は茲の意味合ひは、死ぬ時の意で仰しやつたのである。斯く一代喜ばせて貰ふて居ると、死が来るなり一念に直に參らせて貰へるとお示しなされたのである。夫れを親鸞聖人は直く一念に持つて來て仰しやつた。名高き前念命終後念即生の文であります。即ち『愚禿鈔』のお示しに、

本願を信受するは前念命終なり、  
即得往生は後念即生なり。  
他力の金剛心なりと知る應し。  
便ち彌勒菩薩に同じ。

とあるが之であります。即ち前念に命終するとは、私共がこの廣大の御慈悲を聴かされて、私のこの苦が見捨てられぬとの長の御眞實でましましたかと、初めて



畏入つて本願を信受した一念が前念命終である。その一念に私共のこの迷の生命を絶たれて仕舞ふのである。して「その御思召の難有や」と、頂いて喜ぶ心は、はや後念即生と、淨土に参らせて貰ふ身として頂いたのであるとのお示しであります。そこで此の前第七席で話した、親鸞聖人が十九歳、聖徳太子の磯長御廟で受けられた靈告の御文に、

我三尊化塵沙界

日域大乘相應地

諦聽々々我教令

汝命根應三十餘歲

命終速入清淨土

善信々々眞菩薩

太子が斯く言はれた靈告の御言葉によりて、聖人は廿九歳になれば生命終ると思召してお出になつたのである。爾るに思ひ懸けなく法然聖人にお遇ひになりて、選擇本願の御教化をお聞きになつた一念に、「本願を信受するは前念命終なり」——意外にも十年の昔に十餘歳經つと命終るとあつた靈告の意味は、この本願をお聞きになる一念に、今迄の永劫の迷ひの生命が終る意味であつたのである。「又即得往生は後念即生なり」——命終ると速に清淨土に入るとあつたは、何も遠い死後のことでは無つたのである。斯く思ひ懸けな

く本願の御聞かせに預つた一念に、「其の名號を聞いて信心歡喜し乃至一念せん、至心に廻向したまへり。彼の國に生れんと願すれば、即ち往生を得」即ち其の本願を聞いて、信心歡喜の一念に、廣大の御眞實に腹一杯満足させて貰へた處が、後念即生であつたのである。即ち「御傳鈔」で頂けば

眞宗紹隆の大祖聖人、ことに宗の淵源をつくし、教の理致をきはめてこれをのべ給ふに……

斯く法然聖人が選擇本願の御眞意を力を盡くして御陳べになつた處に、聖人は之を聴聞し給ふや否や

……たちどころに他力攝生の旨趣を受得し、飽まつて凡夫直入の眞心を決定しましけり。

この他力不思議の思召しに、心底から御満足あつた處が後念即生であります。て斯く信の一念に、前念に迷ひの命終り、後念には、佛の眞實心中に生れ代はらせて貰ふのであるから、即ち「他力の金剛心なりと知る應し」これは横超の金剛心の味ひであるとのお言葉である。て斯く聖人が廿九歳、法然聖人にお出遇ひなされて「善知識の言葉の下に歸命の一念を發得せば、その時をもて娑婆のをはり、臨終と思ふべし」——如何に

も廣大の思召であつたと、長の自力根性を畏入り、御眞實一つに満腹なされた處が、十九歳磯長告命が事實に現はれて來た所であることを、能く氣をつけて頂かんならぬのであります。そこでこの意味である處から、靈告の最後の句には、「善信々々眞菩薩」と。こは恐らく私は此のお言葉の意味が今の「愚禿鈔」の文に來て「便ち彌勒菩薩に同じ」とのお示しとなつたでないかと迄思はせて貰ふ程である。即ち他力の金剛心であるが故に、等覺の金剛心を極められた彌勒菩薩と同じく、その一念に於て、眞の菩薩に仕て頂くのだとの御知らせ

## 慶 讚 錄

△信仰は事實である、如來の救済は現前の事實である。吾人の罪惡といひ人生の缺陷といひ、孰も皆事實であるが、之を哀感救済し給ふ如來の大悲は、更に其以上に大なる事實である。然るに吾人之を思索に求め冥想に

である。而して眞の菩薩に仕て頂くのであるから、此の次ぎからは「眞の佛弟子と言ふは云云」といふ御教化が來るといふ順序になるのであります。そこで前に戻りて、「長時永劫に常に無爲の法樂を受く、乃至成佛まで生死を遷す豈に快みに非ず哉。知るべし」——斯く廣大なる佛境に往かせて貰つて、永劫に快みを得させて貰へる。その得させて貰へる力は、實に一念の信心に於て貰はれるのだといふ、茲一つをよく聞取つて頂き度いのであります。

(已上第三回夏季求道會第五日第二席)

武 田 慧 宏

搜りては、徒に五里霧中に彷徨するに止まり、終に往生一定御たすけ治定の念に住することは能きざるなり。是點は我が久しき歎きであつたが、曩に嚴肅なる人生無常の事實に接し、佛かねて知ろしめして此煩惱具



定の凡夫と仰せられたる招喚の事實に面し、また一分の疑義を挿むの餘地なきに至つたのである。謹むて惟ふに親鸞聖人夙に此偉大なる事實の經驗によりて、他力攝生の旨趣を受得し、凡夫直入の眞心を決定しましたのである。されば聖人一代の述作は、畢竟此事實の經驗を表はす記録に外ならぬ。故に聖人の信仰的實驗に參することなくして、聖人の教義、聖人の述作を窺ふも、其眞意に達することは頗る難しい。頃者宗門外の人々が自由なる立場からして、親鸞聖人の研究を志し、或はまた聖人に對して景仰の情を高唱せられる。吾人此傾向を觀て欣快とする者であるが、しかし聖人の偉大なる實驗の事實を味識しなかつたならば、決して研究の眞目的を達することも能はず、また其景仰に内容のなきことを記憶せられたいと思ふ。

△往生一定といふ語は、吾人從來耳慣れて居る爲か、兎角に軽い事に聞流さんとする人が多いのは誠に相濟まぬ。然るに頃日人が之を説くのを聞いて居て、今

さふらふ、しかれば往生はいよく一定とおもひたまふべきなり」信謗共にありとの佛説歴然たることなれば、吾は信じたるに人の謗るありて、益佛説の確かなること寸毫の疑ふ餘地がない。又かの「たとへばひとを千人ころしてんや、しからば往生は一定すべし」との語の如きも、業報によりて如何に罪惡を重ねるとも、救済の本願には些の動搖がないところを示された強い語である。逆如上人は此意を承けて改悔文に、往生一定御たすけ治定と仰せられたも、實に確定したる信心を指したのである。

△さてまた一定の語は、一度に定まるといふ意に味へば中々有難い。歷劫修行は聖道自力の門である、他力の往生は唯一度に定まる。頓極頓速の道である。和讃に、若不生者のちかひゆへ、信樂まことにときいたり、一念慶喜する人は、往定必ず定まりぬ。又金剛堅固の信心の、定まる時をまちえてぞ、彌陀の心光攝護して、永く生死をへだてけるとある。信心の定まる時節に往

更ながら此語の強さを感じた。強さも強し、是以上切詰めたる強き語はなからう。歎異鈔にこの一定の語のある所を窺ふても、「いづれの行もあよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし」、地獄ならてはあもむくべき道もなき身と定まつた、それを如來の願力一つで助けられる。本來其惡るい者が憐れて見捨てられぬ願力である。それ故、「またよく／＼案じみれば天にをどり、地にをどるほどによろこぶべきことを、よろこばぬにて、いよく往生は一定とおもひたまふべきなり、……」眞に地獄一定の身なれば、これを捨て置きぬ願力に由りて、往生が一定するのである、其間に疑もなく慮もなく寸毫の餘地がない。されば聖人のお詞として、其他にもこの語が餘地のない所に使はれてある。即ち「故聖人のおほせにはこの法をば信ずる衆生もあり、そしる衆生もあるべしと佛ときをかせたまひたることなれば、我はすでに信じたてまつる、またひとありてそしるにて、佛説まことなりけりとしられ

生定まる、是れ即ち一念同時である、不體失往生といひ、即得往生住不退轉といひ、平生の時往生の業事成辨するといふは、皆種々の方面から此時節を説明したる語である。しかるに吾等が頂くことは一度であるが、如來の御手許から云へば、決して一度や十度や百度のことでない。釋尊も娑婆往來八千度と云はれる。過去久遠の古から、如來種々の方便を加へさせられ、吾等が御慈悲に氣の付くことを待ち兼ねて下された爲に、この我身が一度の事で往生の定まる身に仕立て、下さるのである。和讃に「往相の廻向と説くことは、彌陀の方便ときいたり、悲願の信行うるひとは、往生かならず定りぬと」ある。永く待ち兼ねる彌陀の方便時いたつた爲に、一念のところを娑婆にありながら、正定聚の身とならして頂くのである。先の和讃に由るも信樂まことにときいたりて、一念の信心を得るのである。金剛堅固の信心の、定まるときをまちえて下さるともある。實に遣る瀬なき御思召と云はねばならぬ。吾信



### 我が身の悪しさを苦にする人に

「何程開いても五分五分根性が止まらぬ」とて、五分五分根性より脱する能はざるに、悶えて居らるゝ方がある。一聽く問はよいが、家に歸へれば忽ち五分五分根性が頭をもたげて来る」とて歎かるゝ人がある。これ等の方に聞いて貰ひ度いことは、

信仰は何も五分五分根性を廢せよとのことでは無いことである。如來の慈悲は、服の立つを脱めよとの仰せては無いことである。否その五分々々の如何に努めても止まらざる點に、無限の同情を持つて下さるが如きである。無限の眞實をあびせて下さるが如きである。

兎角私共は、自分の心かいかわといふことに目がつけば、それを直し度い念か先きになりて、それに向つて、眞實同情の仰せの方は、耳に入らぬといふべきがある。寧ろ問題は、自分の心の直る直らぬに在るのて無い、共に直らぬ惡心に直つて、飽く迄同情し、飽く迄悲憫を加えて下さる大悲眞實の仰せの方に在る。

試みに考えて見るか、い、自分ながら愛想の盡き果てた、醜惡見るに忍びざる私共の心である。既に斯く自分ながら愛想かつきて居る心に、如來は飽く迄この心を善惡と仕給はねばかりて無く、その心の故に我は飽く迄汝と共に在る、其の心の故に離れて去るに忍びぬとの仰せてある、自分自らイヤてなまらぬ心を、佛は飽く迄イヤと仕給はぬといふことは、唯言葉で言へば夫れ迄であるけれども、よくよく考えて見れば、輕いことでは無い。唯口先きて如來はさう言うて下さるのだと思ふ丈いて近づき、立ち上らずに居られぬとある如きの御眞實の方に用かへかなくてはならぬ。抑も如來は何の故に斯く迄我を惡習し給はねばならぬのてあらう。斯く迄やさしく仰しやつて下されればならぬのてあらう。夫れが即ち本願不思議の親心である。大悲捨哀の御眞實にたまはります。自分心の惡の止まざる點に在るので無い。止まざる惡の爲めによくよ呼びかけ、待ち兼ねせ給へる本願不思議の救換の方に在るのである。

## 歎異鈔講義

### 近角常觀

### 第十三章(續)

#### 「藥あり毒をこのむべからず」

そのかみ邪見におちたるひとありて、惡をつくりたるものをたすけんといふ願にてましませばとて、わざとこのみて、惡をつくりて往生の業とすべきよしをいひて、やう／＼にあしざまなることのきこえさぶらひしとき御消息に、くすりあればとて毒をこのむべからずとこそあそばされてさぶらふは、かの邪執をやめんがためなり、まつたく惡は往生のさはりたるべしとはあらず。

是より已下は放縱主義と律法主義とを擧げて、何れも本願の不思議を信じたるものでないといふ事を示さるゝのである、併此十三章の目的とするところは主と

して律法主義の過を示さるゝことが寧ろ此章の主眼にあることなれど、其律法主義を戒むるにつきて、聖人が藥あればとて毒をこのむべからずといはれたることを律法主義にとりて、惡しきものは助からぬと仰せられたると誤解してはならぬ、是畢竟放縱主義を戒められたるものにして、寧ろ本願不思議をいたぐかぬを戒められたのである、決して律法主義を教へられたのではないのである、當時邪見におちたるひとありて、惡をつくりたる者をたすくる本願なればとて、わざとこのみて往生の業とすべきよしをいひて、わざと様々の惡をつくりたる人があつたのである、是大なる誤である、



悪をつくりたる者をたすけんといふ願といふことを、悪をつくりたる者が往生の業となりてたすくるといふ意味に誤解して、わざとこのみて悪をつくりて往生の業とするといふたのである、是實に非常な邪見である、悪をつくりたるものをたすけんといふ願といふことは、悪をつくりたるものなれば、當然惡道に赴くべきである、この惡道に赴くべき惡しきものを悲愍して、到底助かるべからざるものを、助けんといふ不思議の本願であるといふ意味である、其要點たる悪をつくりたる助かるまじきものを、助くるといふ不思議の一點を打忘れて、悪をつくりたるが故に助かることとして、故意に悪をつくりたといふは實に言語道斷の極である、實に間違へば間違ふものである、

末燈鈔第十五章に曰く、なによりも、聖教のおしへをもしらず、また淨土宗のまことのそこをもしらずして、不可思議の放逸無慚のものとのなかに、悪はあもふさまにふるまふべしとおほせられ候なるこ

の人々の、ことにひかみたることをば、制したまはさこそ、この邊より出來しるしにては候はめ、ふるまひは、なにごととも、こゝろにまかせよと、いひつると候らんあさましきことに候、この世のわろきをもすと、あさましきことをもせざらんこそ、世をいとひ、念佛まふすことにては候へ、としころ念佛する人なんと、人のために、あしきことをもし、またいひもせんは、世をいとうしるしもなし、されば善導の御おしへには、悪をこのむ人をばつゝしんで、とおさかれとこそ、至誠心のなかにはおしへおかせおはしまし候へ、いつかはわがこゝろのわろきにまかせて、ふるまへとは候、おほかた經釋をもしらず、如来の御ことをもしらぬ身に、ゆめ／＼その沙汰あるべくも候はず、あなかしこ。

この御消息によりてみれば、當時邪見におちて、實に放縱なことを唱へたもの、ありたことは明らかである、凡夫なればとてぬすみをもし、人をも殺しなんとす

そ、かへす／＼あるべくも候はず、北の郡にありし善乗房といひしものに、つゝにあひむつるゝことなくて、やみにしをみさりけるにや、凡夫なればとてなにごととも、あもふさまならば、ぬすみをもし、人をもころしなんとすべきかは、もとぬすみごゝろあらん人も極樂をねがひ、念佛をまふすほどのことになりなば、もとひかふたるこゝろも、あもひなをしてこそあるべきに、そのしるしもなからん人々に、悪くるしからずといふこと、ゆめ／＼あるべからず候、煩惱にくるはされて、あもはざる、ほかにすまじきことをもふるまひ、いふまじきことをもいひ、あもふまじきことをも、あもふにてこそあれ、さはらぬことなればとてひとのためにも、はらくろく、すまじきをもし、いふまじきことをもいはず、煩惱にくるはされたる儀にはあらで、わざとすまじきことをもせば、返々あるまじきこととなり、鹿島なめかたの人々の、あしからんことをばいひとゞめ、その邊

べきかはとある語氣を見れば、盜みをもすべし殺害もすべしといふ様に、極端なる放縱なる邪見に陥りたる様子である、前にも言へるが如く、悪を作りて惡道へ墮すべかりけるものを、憐みて救ひたまふ不可思議の本願であるといふことを誤解して、悪を作りたるが恰も往生之業であるかの如き邪見に陥りたるのである、覺如上人が常に惡は惡道の業にてこそあれ、決して往生の業ではないと仰せらるゝは、いらざる戒であるかの如く思はるゝが、畢竟當時に此の如き放縱主義が行はれたから、此の如きいらざることを、仰せられねはならぬ必要があつたのである、

口傳鈔善惡二業の事といふ章の中には

あほよそ凡夫引接の無縁の慈悲をもて、修因感果したまへる別願所成の報佛報土へ、五乘ひとしくいる事は、諸佛いまたあこさる超世不思議の願なれば、たとひ讀誦大乘解第一義の善機たりとも、あのがが生得の善はかりをもて、その土に往生することかな



同様の語氣は執持鈔にもあらはれてある、

執持鈔第三章に、

一またのたまはく

光明寺の和尙(善導御こと)の大無量壽經の第十八の念佛往生の願のこゝろを釋したまふに、善惡凡夫得生者莫不皆乘阿彌陀佛大願業力爲増上縁といへり、此心は善人なればとて、をのがなすところの善をもて、かの阿彌陀佛の報土へひまるゝことかなふべからずとなり、惡人また申すにやあよぶ、己が惡業のちから、三惡四趣の生をひくよりほか、豈報土の生因たらんや、しかれば善業も要にたゝず、惡業もまたさまたげとならず、善人の往生するも彌陀如來の別願、超世の大慈大悲に非ずばかなひがたし、惡人の往生またかけてもあもひよるべき報佛報土にあらざれども、佛智の不思議なる奇特を現はさんがためなれば、五劫があひだ之を思惟し、永劫があひだ之を行じて、かゝるあさましき者が、六趣四生よりほかはすみか

まれつきたる善惡のふたつ、報土往生の得ともならず、失ともならざる條勿論なり、されば、この善惡の機のうへに、たもつところの彌陀の佛智をつのりとせんよりほかは、凡夫いかてか往生の得分あるべきや、さればこそ惡もあそろしからずとも、善もほしからずとはいへ、云云

惡が往生の業となるのではない、さればとて善が往生の業となるのではない、善惡の機の上にたもつところの彌陀の佛智の不思議、即助かるまじきものをたすけたまふ御不思議にてたすかるより外に、凡夫いかてか往生の業あるべきやといふ意味である、惡が往生の業ではないといふ様なことは、言ふ必要はなきやうなれど、當時此の如き放縱主義が行はれて居つたゆへに、此の如き戒を與へねばならぬ必要があつたのである、

もなく、うかむべき期なきがために、とりわけむねとあこされたれば、惡業に卑下すべからずとすゝめたまふむねなり、さればあのをわすれて、あふぎて佛智に歸する事なくんば、あのがもつ處の惡業、なんど淨土の生因たらんや、すみやかにかの十惡五逆四重謗法の惡因にひかれて、三途八難にこそしづむべけれ、なにの要にかたゝん。然れば善も極樂にむまゝるゝたねにならされば、往生のためにはその要なし、惡もまたささのごとし、しかればたゞ機生得の善惡なり、かの土ののぞみ他力に歸せずばあもひたへたり、これによりて善惡凡夫のひまるゝは、大願業力ぞと釋したまふなり、増上縁とせざるはなしといふは、彌陀の御ちかひのすぐれたまへるにまされるものなしとなり、

之によりて見れば惡人また申すまでもなく、己が惡業にて三惡四趣の生を引くよりほか、豈報土の生因たらんやといふのである、かくの如き惡人、とても思ひもよ

らぬ報佛報土なれども、佛智の不思議を現はさんがため五劫永劫の御苦勞なれば、かゝる淺ましき六趣四生のほかすみかものなきものゝ爲に、とりわけむねと起したまひし不思議の本願なれば、惡業に卑下せずして、仰て佛智の不思議を信じ奉ることなくんば、己かたもつ惡業何ぞ淨土の生因たるべき、當然十惡五逆四重謗法の惡因にひかれて、三途八難にこそしづむべけれ、惡が何ぞ往生の要にたゝんといふのである。

此等の覺如上人の教化によりて、當時如何にも惡が往生の業といひて、わざとこのみて惡を作りて邪見に陥りたるものゝありし事は明らかである、抑々歎異鈔第二章において、念佛はまことに淨土にひまるゝたねにてやはんべるらん、また地獄にあつる業にてやはんべるらん、總してもて存知せざるなりといふ御語は、矢張同様の誤解に對する御説法である、即上に擧げたる善惡何れかを以て往生の業とする、善を以て往生の業とする律法主義の人は、念佛は自己の善業として往生



の業と考へるのである、又惡を以て往生の業とする放縱主義の人は、惡こそ往生の業となるべけれ、念佛の如きは自力である、僞善である、邊地の往生である、化土の往生である、而して歎異鈔第十七章には、邊地の往生をとぐる人、遂には地獄におつべしとまで主張したのである、畢竟するに念佛は地獄の業と主張したのである、此に於て念佛はまことに淨土にむまるゝたねにてやはんべるらんといふは、律法主義に對する御教化、また地獄におつる業にてやはんべるらんといふは放縱主義に對する御説法である、而して總してもて存知せざるなりと、兩主義を排して、たとひ法然上人にすかされまゐらせて、念佛して地獄におちたりともさらに後悔すべからず候と、地獄必定すみかものを、たすけたまふ本願の不思議を信じたまふ、即よき人の仰せを蒙りて信するほかに別の仔細なきなりとの、親鸞聖人の絶對の信仰をあらはされたものである、

近時歎異鈔第二章を解するにつきて念佛はまことに淨土に生るゝたねにてやはんべるらん、また地獄におつる業にてやはんべるらん、總してもて存知せざる也とあるを解して、恐くは聖人御在世の末年、關東に日蓮宗起りて、念佛無間等の四箇格言を唱へたるによりて、之を聖人に問ひ奉りたのであるといふ説がある、是は頗る滑稽の至である、前來述べ來りたるが如く、聖人の晩年に於て律法主義と放縱主義が相錯綜して、頗る混亂の有様であつたのである、聖人は此内部の紛雜に對して、親鸞におきては唯念佛して彌陀に助けられ參らすべしと、よきひとの仰せを蒙りて信するほかに別の仔細なき也といふ一語を以て、快刀亂麻を斷つが如き御教化を下し給ひたのである、夫を何ぞや日蓮宗に對する説法の如く解するは、頗る方角違ひの見解である、併勿論之を適用して、日蓮宗に對するも、其他の諸門に對するも、亦經釋をよみ學問せざる者往生不定のよしと言ひたる門内の智者學者に對するも、差支なきのみならず、誰に對しても念佛は善か惡か知らぬといふ態

度をして相對的の争に陥らぬとは、如何なる場合に於ても一貫すべきである、即第十二章に於て「たとひ念佛はかひなきひとのためなり、其宗あさし、いやしといふとも、さらにあらそはずして、われらがごとく下根の凡夫、一文不通の者の信すればたすかるよし、うけたまはりて信じ候へば、われらが爲には最上の法にてまします、たとひ自餘の教法はすぐれたりといふとも、みづからがためには器量およばされば、つとめがたし、われもひともし生死をはなれんとこそ、諸佛の御本意にておはしませば、御さまたけあるべからずとて、にくひけせずは、たれのひとかありてあだをなすべきや」といふは、此第二章を標準として當時の智者學者風の異義に對する歎異鈔の御諭である、であるから現代に於ても、此態度を以て我等は唯我信すべきを信するのみにて、對他的論議を爲す必要はないのである、併歎異鈔第二章の目的とするところは、決して日蓮宗ではない、のみならず恐くは當時十餘ヶ國の境を越えて、身命を顧み

ずして尋ね來りて、聖人に御尋する位のものが、日蓮宗の言議位に心を勞はして居るものはないのである、モット劃切なる自己内心の問題、特に律法主義と放縱主義の二潮流が、外界に相争ひつゝあるのみならず、内面には各人の胸中に於て波瀾を擧げつゝあるのである、現代に於ても善を爲すべし、惡をなすべからずの律法的修養と、善惡に囚はるべからず、自然に任すべしなどいふ自然主義的思潮の二潮流が、事實として相争へるは、即現代人の胸中に、此二者が内面に戦ひつゝある反映に過ぎないのである、當時も畢竟此信仰上、思想上の大問題を提げて、十餘箇國の境を越えて御尋ね申したのである、而して其聖人の御教化が、人生の光明として偉大なる解決を與へらるゝことは、當時同様に現代に於ても歎異鈔が、千古論らず世の燈明として仰がるゝ所以である。

猶一步進みて當時惡は往生の業である、自力念佛は地獄の業であるとして、極端なる放縱主義に趨りたる



有様を、多少文獻に徴して見ようと思ふのである、是は單に當時の問題とばかり看過すべきではない、實に現代の生きた問題である、之に對して聖人が諄々として諭されたる御消息がある、畢竟思想上に關する問題なれば同時に起りつゝある、念佛者の諸神諸佛に對する態度と、又當時の爲政當局者の念佛者に對する態度までが、歴々として見るが如くである、畢竟するに此種の問題の起りつゝある時は、わざとこのみて惡を作りて往生の業とすべきよしをいひて、やう／＼にあしさまなることの、きこえたることきたることを忘れてはならぬ。

御消息集第四章に曰く

まづよろづの佛菩薩を、かろしめ、まゐらせ、よろづの神祇冥道を、あなづりすてたてまつるとまふす、このことゆめ／＼なきことなり。世々生々に無量無邊の諸佛菩薩の利益によりて、よろづの善を修行せしかども、自力にては生死をいでずありしゆへに、曠劫

しるものをば名無眼人ととき、名無耳人とおほせおかれたるとにさふらふ。善導和尚は五濁増時多疑謗道俗相嫌不用聞見有修行起瞋毒方便破壞競生怨とたしかに釋しおかせたまひたり、この世のならひにて念佛をさまたげん人は、そのところの領家地頭名主のやうあるとにてこそさふらはめ、とかくまふすべきにあらず、念佛せんひと／＼は、かのさまだけをなさんひとをばあはれみをなし、不便にちもふて、念佛をもねんごろにまふして、さまだけなさんをたすけさせたまふべしとこそ、ふるきひとはまふされさふらひしが、よく／＼御たづねあるべきことなり。つぎに念佛せさせたまふひと／＼の、彌陀の御ちかひは、煩惱具足のひとのためなりと、信ぜられさふらふはめてたきやうなり。たゞしわるきものためなりとて、ことさらにひがとをこゝろにもちもひ、身にも口にもまふすべしとは、淨土宗にまふすことならねば、ひと／＼にもかたることさふらはず。おほかたは煩

多生のあいだ、諸佛菩薩の御すゝめによりて、いままふあひがたき彌陀の御ちかひにあひまいらせてさふらふ御恩をしらずして、よろづの佛菩薩をあだにまふさんは、ふかき御恩をしらずさふらふべし、佛法をふかく信ずるひとをば、天地にははしますよろづの神は、かげのかたちをへるが如くしてまもらせたまふことにてさふらへば、念佛を信じたる身にて、天地の神をすてまふさんとおもふこと、ゆめ／＼なきことなり、神祇等だにもすてられたまはず、いかにいはんやよろづの佛菩薩を、あだにもまふし、おろかにおもひまいらせさふらふべしや、よろづの佛をおろかにまふさば念佛信せず、彌陀の御名をとなへぬ身にてこそさふらはんずれ、詮するところはそらごとをまふし、ひがごとをことにふれて念佛をとめんとするところの領家、地頭、名主の御はからひとまふらふらんこと、よく／＼やうあるべきことなり、そのゆへは釋迦如來のみことには、念佛するひとをそ

惱具足の身にて、こゝろをもとめかたくさふらひながら、往生をうたがはずせんとおぼしめすべしとこそ、師も善知識もまふすことにてさふらふに、かゝるわるき身なれば、ひがごとをことさらにこのみて、念佛のひと／＼のさはりとなり、師のためにもとがとなさせたまふべしとまふすことは、ゆめ／＼なきことなり、彌陀の御ちかひにまうあひがたくしてあひまいらせて、佛恩を報じまいらせんとこそおぼしめすべきに、念佛をとめらるゝことに沙汰しなされてさふらふらんこそ、かへす／＼こゝろをえずさふらふ。あさましきことにさふらふ、ひと／＼のひがさまに御こゝろをともさふらふゆへ、あるべくもなきことどもきこへさふらふ、まふすばかりなくさふらふ、たゞし念佛のひと、ひがごとをまふしさふらは、その身ひとりこそ地獄にもち、天魔ともなりさふらはめ、よろづの念佛者のとがになるべしと、おほえずさふらふ、よく／＼御はからひとまふら



ふべし、なをく念佛せさせたまふとく、よく  
この文を御覽じとかせたまふべし、あなかしこ

九月二日

親鸞

念佛之人々御中へ

此御消息と全く同様のことを書き、慈信坊善鸞へ與へられたのが次の第五章である、そして其中には信願坊が、此邪見を主張したることを慨歎したまひて戒しめられてある、而して此の如き邪見を唱へたる人は、其身獨りのとかとこそなるべきである、決して念佛者全體の罪ではない、之を以て一般の念佛者を止めんとす意ある迫害である、さればとて其迫害を悪くせずして、反てあはれみをかけて悪むなどの懇ろなる御諭である、而して其御消息の追而書が、如何にも剴切なる御教化である、曰く

入信坊、眞淨坊、法信坊にもこのふみをよみきかせ

人は、皆聖人の御眞意なるべしと誤解して、九十何人といふ多数が大部の中太郎を去りて、慈信坊の方へ轉じたといふことである、併聖人の御消息を拜見するに、いづも誰が悪いといふて其人を咎めたまふとはない、畢竟信心のたぢろぎたるは、其人の信心が定まらぬ爲て決して他人の罪ではない、たぢろぐものなれば他人の誘惑がなくとも、たぢろぐのであるから、却て眞の信心に入れよと呉々も示されてあるのである、併此等の邪見の人と、又之が爲に念佛を迫害する人とに對しては、深く戒められてある、正像末和讃に、造惡このむわが弟子の、邪見放逸さかりにて、末世にわが法破すべしと、蓮華面經にときたまふ、念佛誹謗の有情は、阿鼻地獄に墮在して、八萬劫中大苦惱、ひまなくらくとそときたまふ、とあるはたしかに此内部の獅子身中の蟲と、外部の無眼人無耳人に對する嚴誠である、實に教界内部には、邪見放逸の放縱主義が充滿し、世間外部には無信誹謗の律法主義が跋扈して、眞實佛法の燈が消えな

たまふべし、かへすく不便のことにさふらふ、性信坊には春のぼりてさふらひしに、よくまふしてさふらふ、くげどのによくくよるこびまふしたまふべし、このひとく、ひがごとをまふしあふてさふらへばとて、道理をばうしなはれさふらはんとこそおぼえさふらへ、世間のことにさるることのさふらふぞかし、領家、地頭、名主のひがごとすればとて、百姓をまどはすことはさふらはぬぞかし、佛法をばやぶるひとなし、佛法者のやぶるにたとへたるには、獅子の身中のむしのし、をくらふがごとしとさふらへば、念佛者とは佛法者のやぶりさまたげさふらふなり、よくくこゝろえたまふべし、なをく御ふみにはまうしつくすべくもさふらはず、

實に聖人は獅子身中の蟲とまで戒められたることを肝に銘せねばならぬ、蓋し此邪見放逸の一派は、善乗坊信願坊、慈信坊、等によりて靡然として風を爲し、特に慈信坊が此誤に陥りたるために、信心堅固ならざる

んとする有様が髣髴見るが如くである、

此の如き邪見に對する御教化が、未燈鈔の終より第二通目の長き御消息である、實に懇篤懇勸諄々として到らざるなき御示である、全體此御消息は、四通の御消息を一續きに書きたるものなれば、同様のとが度々繰返へさるゝのである、其最後の一通を擧げて見よう、一方には嚴父の如き秋霜烈日の如き御誠の裏に、一方には慈母の如き春風冬日の如き團々たる慈誨を以て、所謂囀んで、くゝめる様な御教化である、即藥あればとて毒をこのむべからずといふが此眼目である、是も藥あればとて毒を好むべからずといふのである、此藥あればとてといふとは、毒を好むといふ文字にかゝるのである、藥あるゆへに大丈夫じゃからといふて、毒を好んでもよいといふのである、而して此邪見全體を否定した言が可からずといふのである、藥あればといへばとてといふ反語を用ゐたる意味にあらず、藥あるゆへに差支なしといふ意味で、毒を好む理由にして居るので



ある、前の彌陀の本願不思議にあはしませばとて悪を  
あそれざるといふのと同じ語調である、現に御消息に  
は藥あり毒を好めと候らんことはあるべくも候はぬと  
ある、曰く

方々よりの御こゝろざしの物とも、かすのまゝにた  
しかにたまはり候、明教房ののぼられて候ことあり  
がたきとに候、かたゝの御こゝろざし申しつくし  
がたく候、明法御房の往生のと、おどろきまうすべき  
にはあらねども、返々うれしく候、鹿島なめかたの奥  
郡に、かやうの往生ねがはせたまふ人々みな御よ  
ろこびにて候、又ひらつかの入道殿の御往生のごと  
き候こそ、返々申すに限りなくおぼえ候へ、めてたさ  
申つくすべくも候はず、おのゝみな往生は一定と  
おぼしめすべし、さりながらも往生をねがはせたま  
ふ人々の御中にも、御こゝろえぬことも候き、いま  
もさこそ候らめとおぼえ候、京にもこゝろえずして  
やうゝにまといあふて候めり、國々にもおぼくき

して、阿彌陀佛のくすりを常にこのみめす身となり  
あはしませしあふて候ぞかし。しかるになをえひもさ  
めやらぬにかさねて醉をすゝめ、毒もきえやらぬに  
なを毒をすゝめられ候らんこそ、あさましく候へ、煩  
惱具足の身なればとて、こゝろにまかせて身にもす  
まじきことをもゆるし、くちにもいふまじきことを  
もゆるし、こゝろにもおもふまじきことをもゆるして、  
いかにもこゝろのまゝにてあるべしとまふしあふて  
候らんこそ、返々不便におぼえ候へ、えひもさめ  
ぬさきに酒をすゝめ、毒もきえやらぬに、いよ  
ゝ毒をすゝめんがことし、くすりあり、毒をこのめ  
と候らんことは、あるべくもさふらはずとこそおぼ  
え候。佛の御名をもき、念佛を申してひさしくなり  
ておはしまさん人々は、後世のあしきをいとふし  
るし、この身のあしきことをばいとひすてんとおぼ  
しめすしるしも候へ、はじめ佛のちかひをき、は  
じむる人々の、わが身のわろく、こゝろのわろきを

こゝ候、法然上人の御弟子のなかにも、われはゆゝし  
き學生など、おもひあひたる人々も、この世にはみ  
なやうゝに法文をいひかへて、身もまとい、人をも  
まといして、わづらひあふて候めり、聖教のをしへを  
もみずしらぬものゝやうにおはしますひとゝ  
は、往生にさはりなしとばかりいふをき、あしき  
まに御こゝろえあることおぼく候き、いまもさこそ  
候らめとおぼえ候、淨土の教もしらぬ信見坊などが  
申ことによりて、ひかさまにいよゝなりあはせた  
まひ候らんをき候こそ、あさましく候へ、まづ  
のゝ昔は、彌陀のちかひをもしらず、阿彌陀佛  
をもまふさずおはしまし候しが、釋迦彌陀の御方便  
にもよほされて、いまちかひをき、はじめはおはし  
すま身にて候なり、もとは無明の酒にえひて、貪欲  
瞋恚愚痴の三毒をのみこのみめしあふて候つるに、  
佛の御ちかひをき、はじめより、無明の酔もやう  
ゝすこしつゝいさめ、三毒をもすこしづゝこのま

もひしりて、この身のやうにては、なんぞ往生せん  
ずるといふ人にこそ、煩惱具足したる身なれば、わ  
がこゝろの善惡をばさたせず、むかへたまふぞとは  
申候へ、かくききてのち、佛を信ぜんとおもふこゝろ  
ふかくなりぬるには、まことにこの身をいといひ、流  
轉せんともかなしみて、ふかくちかひをも信じ、阿  
彌陀佛をもこのみまうしなんどする人は、もともこ  
ゝろのまゝにて惡事をふるまひなんとせじとおぼ  
しめしあはせたまはゞこそ、世をいとふしるしにて  
も候はめ、また往生の信心は、釋迦彌陀の御すゝめに  
よりておこるとこそみえて候へば、さりともまこと  
のこゝろおこらせたまひなんには、いかゞむかしの  
御こゝろのまゝにては候べき、この御中の人々も、少  
々はあしきさまなることおぼ候めり、師をそし  
り善知識をかるしめ、同行をもあなづりなんどしあ  
はせたきふよしまし候こそあさましく候へ、すでに  
謗法のひととなり、五逆のひととなり、なれむつづべか



らず、淨土論と申文にはかやうの人は、佛法信ずるころのなきより、このころはおこるなりと候めり、また至誠心のなかには、かやうに悪をこのまんに、つゝしみてとをさかれ、ちかづく可らずとこそ、どかれて候へ、善知識同行にはしたしみちかづけとこそときをかれて候へ、悪をこのむ人にもちかづきなどするとは、淨土にまいりてのち衆生利益にかへりてこそ、さやうの罪人にもしたしみ、ちかづくことは候へ、それもわがはからひにはあらず、彌陀のちかひによりて御たすけにてこそ、おもふさまのふるまひも候はんずれ、當時はこの身どものやうにては、いかゞ候へかるらんとおぼえ候、よく／＼案ぜさせたまふべくさふらふ、往生の金剛心のおこること佛の御はからひよりおこりて候へば、金剛心をとて候はん人は、よも師をそしり善知識をあなづりなんとすることは、候はじとこそおぼえ候へ、この文をもてかしま、なめかたの南の莊いづかたも、これにこそろざしおはしますらん人には、おなじ御ころによみきかせたまふべく候、穴賢々々

建長四年二月二十四日

實に親切身に沁む御教化である、此の如く薬あり、毒を好むといふことはあべるさことでない、されど是は佛の御慈悲をいたゞきたる已上に於て心得べき事をいふのであつて、初めて御慈悲を聞く人に對しては、自分の様に悪しきものは往生いかゞと心配する人に對しては、煩惱具足者のなれば善悪をさたせず助けたまふと申すと御示し下さるのである、即薬あり毒を好むべからずと仰せられたは、邪見に陥りたる者を戒むるために仰せられたなれど、未だ無明の酒に酔ひ、三毒の煩惱に溺れたるものに對しては、夫を救ひたまふ不可思議の御薬が、阿彌陀佛であると御示し下さるのである、毒あるものは助からぬ、酔へるものは見捨てるといふのでない、毒をさまし酔をさますための薬であれば、決して悪は往生のさはりであるといふのではない、然るに動もすれば放縱主義を戒めて、佛智不思議を信ぜよと仰せられる仰を律法主義にとりて他の極端に走りて悪を往生の障であるかの如く誤解せんとする律法主義を戒めて、彌陀の本願不思議におはしますゆへに、悪は往生の障とはならぬといふが此章の眞意である。

# 人生

の

# 轉換

(教誨)

近角常觀

其

唯今御紹介を頂きました通り、追吊會を営まれるに就て、一場の講話を致す様にと、御懇切なる御招きに預り、一同の人々と斯く御話が出来得る事は、非常に難有き因縁であると、感謝する次第であります。

扱て今日は彼岸の中日であつて、在監中に亡くなつた人達の追吊會を営み、一人々々が幼少の時養育の恩を受け、種々親しみを重ねられた、親類縁者の人達の、在世の昔を追懐せられ、今日の團欒を必ず深く、心に感ぜらるゝことと思ふのであります。

御話致したい事は澤山ありますが、其中に就て、特に私は、種々と親に育てを受けし事を、第一に思ひ出すのであります。

先づ私共が常に精神上の事に付き、種々と研究を重ねるに從て、親や祖先其他種々なる人々の恩に就て、

考へて居るのであります。是れは心ある人々の常に言ふ所でありますが、一言申して見ますならば、私が幼少の時、私の父が私のために、一場の御伽噺の様な教訓的の道話を、話して呉れた事があります。私は其れを何時思ひ出して、味ひ切れないのであります。之れは能く雜誌等に書いてあることではありますが、御話致して見ませうに、

昔或所に親不孝の子供があつて、自分を育て、貰つた大恩ある親が、年を老つて自由が利かないのを不足に思ひ、山に連れ行き、捨てやうと思つて、奥山へ捨てに行つた事があります。是れは眞に子供騙の様な噺であります。けれども深く味うて見ると、第一に此壇に立つて居る私が、何故に現今の身體があるか、又文字の一つも讀めるのは、誰れの恩であるかと言ふに、



皆親と師匠の恩ならざるはない。一人て物を覺えた様に考へ、教へて貰つた智識に依つて、自分は如何なる事を行ひ、どう言ふ事を考へて居るかと思ふと、何等の感恩の情もなく、全く親や師匠を捨て、居るのであります。老年の親を籠に乗せて、捨てに行つたのは昔嘶ではない。皆自分がさういふ事をして居るのであります。所が誰も善く分つたつもりで、親は難有いものであると言ふのは、親をすてつゝある有様である、然るに親は籠の中に乗せられて、捨てられに行くのを知り乍ら、手を伸して、道側にある木の枝を折り草を結び乍ら行くのであります。之を私の身に譬へますれば、私の父親は拾二年前に亡くなつて、今に母は唯一人國に残つて居られるのであります。其親に孝行もせず、すまぬ／＼と思ひ乍ら、日暮をして居ります。此夏も七十有餘日の間も、傳道旅行をして、其途中國に歸つて見ると、母は老衰して身體甚だ不自由であります。然るに私は又た、其れを見捨て、東京に來た様な次第で、父を捨て母を捨て、全く親を捨てて居るのであります。今の話は昔の姥捨山の嘶ではない、自分の身の上であると思はなければなりません。然るに今申す通り親は

別に不足も言はぬ、親と言ふものは難有いものであります。と、善く親の心が分つたつもりで居ります。現に誰れかに對つて、汝さんの親は、今は何うして居るかと思ふと、大抵の人は、國に居るとか、既に亡くなつたとか、斯うですとか、彼あてすとか、種々に答へる事と思ふが、其親は何ういふ心を持つて居れるかと言ふに、私の不孝の罪も責めもせず、却つて慈悲深き情けをかけて、黙つて居て下さる、之れが親の優さしい所であると、横着しながら難有いと云て居る。是大抵の人に見かける所であります。斯く親は優さしい者であるとのみ思つて居るのが間違である。然し私共は此様な事はいかぬと思ひ乍ら、致し方がないと言つて横着に日暮をして居る。かくの如くして遂に親を姥捨山に捨て、歸らんとするのである。其最後の別れに臨んで後悔するのは、何の益にもたぬ事と思ひます。是れが親を捨てると言ふ事になるのである。而して最後に及び氣が付いた時には、最早や及ばないのであります。其時親は何う感じて居られるか、子供には解からない。今の御伽嘶の續に、路傍にある木の枝を折り草を結び、種々の目標をして居られるのが、子供に

は判からぬから、子供の方では、ン彼あして置いて、親が捨てられた後から歸つて來る了簡と見える、と考へて親の心を輕蔑し、皆之れを踏み碎いて行つたと言ふのであります。即親が日夜あうせよ斯うせよと言つて下さると、之れを敬して遣さず、夫れも解かつて居る、彼れも解かつて居ると、親や祖父が言つて下さる事を、何も彼も解つて居ると言ふ氣で居るのであります。故に親の教を皆踏み碎き、親を輕蔑して居るのであります。有體に申すならば、親の言ふ事は、少しも身に沁めて味はないで、踏みにじり踏み碎いて居るので、姥捨山の話の様に、親を山に捨て、居り乍ら、解らずに居ると言ふのは、吾々の實際の状況であります。

愈々別かれるに臨み、親の言はれるには、今となつてはもう何も言ふ事はないが、汝は親が立ち戻ると思ふか知らぬが、今汝と別れるれば再び會ふ事はない。來る道で木の枝を折り草を結んで、道標を拵しらへて置いたのは、汝が歸つて行くのに、道が解るまいかと思つて、結んで置いたのであるから、迷はない様に、其道辿つて歸れよと、申されたと言ふ、私共が親や師匠の言はれる事を聽かないで、唯八釜しいと計り思つて、

居るのは間違であります。監獄内に於ても教誨師の方々に、典獄様や、一同の吏員の方々が、世話して下さるのに、却て此方では、彼あいう斯ういうと、要らざる世話だと言ふ様に、思つて居りますが、親の言はれる事を能く聞いて見ると、汝が行き先きを迷はず、一生涯うまく行ける様にと、心配して下さるのであります。私の道標を辿つて行けよと、最後に親が言つた、其親の心を聽いて、初めて親の慈悲が解かつて來るのであります。親の身を捨てる様な不孝不實な子でも、親の遣る瀬ない眞實で、親を捨てる子を捨てないで下さるのが親の心であります。親の難有味も其所であらう。親や祖先は其身が亡くなつても、後に殘る其子の身の上を思ふ様は、自分が捨てられ乍らも、子供の身の上を心配せらるゝ姥捨山の嘶と同じで、何日かは其親の心が解かる事となるのであります。姥捨山で親の心を聞いた時には、如何に不孝な子でも恥ぢ入つて、親を捨てる事が出来なかつたのであります。夫れと同様に、親は唯優さしくして下され、可愛がつて下さるばかりが親の心ではない。如何に不孝な私を、何所までも見捨てないと言ふのが親の心であります。



茲に居る人々の中には、親の存命して居る人もありませう。又た親が亡くなつてしまつた人もありませう。何れにしても其親の心に於ては、縦令ひ、自分の存命中に自分の心が解からずとも、何日か知らしてやりたいと思つて死んだ親も多い事だらうと思ひます。其祖父や親の心を思つて見れば、初めて親の心が總ての人の心に貫徹することゝなつて、自分の心に安心する計りではない、此先人生の道標を得ることゝなつて、安穩な日暮の出来得る身の上となるのであります。親の心で親の心を知らして貰へば、今迄の人生の道が一變してしまふのであります。其所で親の恩を感じる様になるのであります、今までの如うな心なら、殊に今日の様な日でも、祖父や親の事は思はれなんだのに、直ちに親の恩を思ひ出す様になるのであります。

私は自分の話ばかり申す様であります、私の祖父は、私の親が六歳の時に死んだので、私は少しも知らないの、唯昔の人だと許り、思つて居りました、然るに昨今感じますは、私が信仰の話を味はう様になつたのは、全く祖父の力に依つて居ることが、廣大であると言ふ事を、ツクツク感じて居るのであります。

らどうして安心が出来ませう。然るに此の如く安心さして貰ふ事の出来ると言ふのは、不實不孝な私を、親や祖父は何所までも見捨てずに、私の不實を咎めず、憐んで下さる親の眞實があるからであります。其眞實で夜が明けると、忘れてはなりません。如何程親不孝な者でも、親の眞實に依つて初めて目が醒めるのであります。

抑も不實な私と、親の眞實とが、如何なる關係であるかを、よく頂かねばならぬ。私共のする事は、皆不實であります。が、今親の眞實に依つて、其不實が打明かされ、其不實を見捨てぬ親の眞實によりて、不實の心が謝りはてし、而も安心さして貰ふのであります。折角の所でありますから、今一步進めて、御話いたしませう。

唯今申す通り、私共のする事、爲す事皆不實であります。けれども何處までも見捨てずに、案じて下さる親の眞實の恵みが、私共の心の中に貫徹して下された其時に、自分の心が誤りであつたと言ふ事が知れて来て、私共の心の中が、明かになるのであります。親の眞實心の光が、私共の心の中に這入る其時に、親の眞

私は十六七歳の頃から、祖父の筆記した書物を讀んで居つたのであります、近頃まで何とも思はなかつた。所が信仰を味うて見ると、祖父の仕事に氣が付いて、私はだん／＼其御恩を思ひ出す事でありました。私が信仰の門に這入つたのも、皆祖父の賜物であります。先日も祖父の書きた奥書を見ますに、私の祖父は三十年間も、筆記ばかりをして一生不遇で終つたが、是でも不淨説法の罪にまざると萬々なりと書いてありました、是を見て驚きました。何んとなれば私共は實に不淨説法ばかり仕て居るのであります。不淨説法と言ふのは口先きに法を説いて、心では佛に反く様な、日暮をして居る事を、不淨説法と申しますが、祖父の中すには、たとひ一代筆記して暮しても、不淨説法の罪よりは輕いといふのであります。此筆記を讀みて其御蔭で御法を知らして貰ふたのであります。自分の力は一つもない祖父の御蔭であります。そして我身を願れば不淨説法をして居ります。慚愧に堪へません。之れは皆さんも同感であらうと思ふて、一言申した次第であります。

親と祖父とに就いて、自分の過去を考へて見ますと、今申す通り、道標を踏み碎いて居る私共であります。實で私の不實を見捨て、下さらぬことが頂かれるのであります。

私が嘗て書きました懺悔録と言ふ書物の中に、私の信仰に這入つた、道行きが書いてあります。是れは皆さんが看讀せられた事と思ふが、其一番の要點を御話致します。抑、人と言ふものは、自分が悪いとは思はれないものであります。自分が善いと思はれないものであります。自分が善い他人が悪い、自分が悪いのではない、他人が悪いのだと、誰れでも思つて居るのであります。が私共の信仰の原因は何であるかと言ふと、平常私共が善いと思つた事が皆間違であつたといふことが根本であります。たとへば心で平和を望む人でも、人と一致を保たうと思ふ人でも、必ず他人に對して悪く思ふて居るのである。而して自分は善いと思ふて居るのである、其様に他人は悪い、自分は善いと思ふから、人と一致平和を來すことが出来ぬのである。して見ると抑、自分が善いと思ふて他人を悪く思ふのが根本の誤である。例へば監房に居つても、さうに違ひない。抑、人間が自分の心と人の心と、一致して居るのならよいが、凡て人は自分が善いと思



ふと、人が悪く思はれ、自分が善いのだ人が悪いのだ、と思ふ根性が仲々人間の心に止まないものであります。争ふと言ふ事は悪い、人と仲好くして行かぬばならぬと言ふ事は、皆知つて居るが、若し人が努めて善い事をして、俺は善い事を爲したと思ふ心は止まない。痛切に申して見れば、皆の人々が同じ監房内に居つても其通りで、必ず自分は善い、他人は悪いと思ふのでありませう、是れが總ての間違の元であります。之れは相手の方から言ふと、亦同様で、自分が善くて他人が悪いのだ、此の如く御互に自分が善い、人が悪い、人が悪い自分が善いと思ふ事、是が世の中の萬事萬端争の基となるのであります。聖徳太子の十七憲法の中の第十條に、

忿を絶ち、瞋を棄て、人の違へるを怒らざれ。人皆心あり。心各執る所あり。彼是なるときは則ち我非なり。我れ是なるときは則ち彼非なり。我必ずしも聖に非ず。彼必ずしも愚に非ず。共に是凡夫のみ。是非の理詎ぞ定むべけんや。相共に賢愚なる事環の端なきが如し。是を以て彼瞋ると雖も、還て我失を恐れよ。我獨り得たりと雖も、衆に従ひて同じく舉

なへよとあります。人間は自分が善いと思ふゆへに腹が立つ、遂には争ひを始め、應て大にしては世界の大騒動、小にしては一家の不和となるのも、皆之れから起るのであります。俺が善い人が悪い、人が悪い俺が善いと、斯うして行くと、終には何んな事になるか解からぬ。自分が経験したのも此人と人との隔て心の苦しみてありました。私は宗教のために骨身を折つて見たが、最後に、自分は是れ程までして居るのに、社會はそれほどまでに思つて呉れない、馬鹿々々しいと云ふ氣になつて來るのであります。皆の人々も必ずさうであらうと思つて、同情するのであります。凡て茲に居られる人々は、皆其所に種々なる事情に依つて、入監の身となられたのであります。が斯く入監の身となつてみると、道徳や法律に於て、解釋の出來ない事が、多いであります。心の中を考へ境遇を考へて見ると、彼の時彼あせなかつたら、斯うならなかつたのである。斯うすれば彼ならなかつたのであると思ひ、種々残念な事があつて、皆の人々は悲しみが多い事だらうと思ひます。有形的にも無形的にも、種々悲しみを感ぜらるゝ

事でありませう。さうして失望落膽の極、凡ての人は、種々無量な苦しみが出て來るのであります。私は多くの人々に、聞いて見て知つて居るが、私の言ふ事は、凡ての人々に的的して居る事と思ふのであります。私共は何んな善き精神を持ち、理想的な考を持つて居ても、自分が善いと思ふ間は皆罪惡であります。私共が人のために盡すにしても、最後には斯うもし彼あもしてやつたのにと、今迄の事を思ふのが原因で、人を恨み不足に思ふ事が、澤山に起つて來るのであります。五分五分でする事は、皆惡であります。故に眞實の善と言ふ事は、人間の身の上にはないのであります。宗教家の所謂、吾々の行爲は皆罪惡であると言ふのも、茲の所を言ふのであります。

ぬ。斯うするがよい、彼あするが善いと、仲よくすることは能く知つて居る。然し總ての人に善くする事は六ヶ敷い。親に不足を申してはならぬと思ふが、親の言ふ事を踏み碎いて居るのであります。さうして世を恨み人を妬むで居るのであります。親のして下さる事を、踏み碎いて、日夜暮して居るのであります。能く皆さんが、世の中を不足に思ひ、俺が社會に出れば、社會は彼あ思ふだらう、斯う思ふだらうと、社會を敵視して居るのであります。社會は皆吾々を迫害するものだと思ふから、何時までも、社會に容れられなないのであります。社會を不足に思ふから何うしても、見る事、聞く事、さういふ工合になるので、社會を此方から、自分の考へに當てはめて、身を立てやうとするから、何所までも駄目である。宗教の上から申せば、生死の苦海に流轉して、浮む瀬がないのであります。生死の苦海涯りなしと言ふのは、此所の事を言ふのであります。無暗に人を疑ひ争ふと言ふのは、皆自分の方から、先き廻りをして、蓋をしてかゝるのであります。是れが大きな間違で、人生の波瀾の中に、自分の身を縮めて、身を亡くするのであります。さうして懸



ては、流轉して多年の間、苦しむ事とはなるのであります。かくなりて見れば我々は結局浮ぶ瀬がなくなるのであります。

かくなれば我々の望む處は私共の性質や境遇から、自分と言ふものを理解して、同情して呉れる、眞の同情者が、友達の中に、一人でもあれば結構であります。然し皆の人々はどうであるか、そんな人は世間には全く稀であらう。總て人と言ふものは、精神上理解せられない時は、人は苦しみ惱むものであります。眞實の同情者さへあるならば、私共は浮ぶ瀬がなくとも、心の中に光明を得て、世の中に立つ事が、出来るのであります。此の眞の同情者が、如來の慈悲であります。私の書いた信仰の餘瀝や懺悔録の要點は、其所の點を書いたのであります。凡て我々の心の中の有様も、總ての人の境遇も、一人として世の中に救はれないものはない、如來の光明を蒙らないものはないので、如何に不孝な子供でも、遣る瀬なく思ふて下さると同様に、如何に不實極る私共を、何處へまでも遣る瀬なく思ふて下さる、此の廣大な御慈悲が如來の本願であります。懺悔録にも書いてあるが、私共が如來の本願を聞いて、

第一に氣が付いた事は、人を相手として生活して居た事の、間違であつたこととあります。人を當にして生活して居るから、間違が起るのであります。實際私共は、人と比較して、自分が善い他人が悪いと、いふて日暮をして居るのであります。私共は人が善くても悪くても、其れに依つて日送りをするのではなく、一人々々を憐んで下さる、親の眞實、親様に遇ふて見れば、他と比較して居るのが、私共の間違であります。總ての人が、社會の人を疑ふのは、無理もない様であるが、自分の方から、さういう疑ひの心、隔て心を持つて、社會の人は、自分を斯う思つて居るだらう、社會の人は斯ういう心で、顔を見て居るのではないかと、自分の方から疑ふて、苦しみ惱んで居るのであります。斯様な境遇のものを、遣る瀬なく思つて、憐んで下さる、佛の御心を頂いて安心するのであります。然るに今までは安心せず、自分は人を疑ふてかゝつたのであります。社會を疑ふて、攻撃的態度で居つたのでありますから、苦しんだのであります。然るに此の如きものを御見捨てもなくして吾々の心に同情し、遣る瀬なく思ふて下さるのが、佛であります。汝の境遇

がさうであつて見れば、疑るのも無理はない、隔てたのも無理はない、と言つて同情し、何所までも我々の心を見抜いて、遣る瀬なく思つて下さる御慈悲を頂いて見れば、自然に今迄の不足の心も疑の心も解けて來るのであります。人が善いの悪いのと言つて、日暮をして居るものを、遣る瀬なく思召す心が難有い。かくなれば今迄人が悪いと思ふて居たが、人が悪いのではない、此方から疑ふてかゝつて、今日まで生活したのが間違であります。今迄は淺ましい日送りをして居つた私も、佛の眞實の心に打明かされて、初めて難有いと言ふ心になるのであります。全體自分が、そんな心を持ちながら人を不足に思ふのが、間違であります。いや友達同志でも、さうであります。自分が悪るかつた事が知れれば、ア、僕は實に濟まなかつた、許して呉れ玉へと、謝罪れば、友達は言ふだらう。いや謝罪つて呉れるには及ばない、かく分つて呉れれば十分である、飽迄我誠意を盾けたいばかりであつたと言ふに違ひない。斯様な心になつたのが、所謂心光攝取であります。自分の方から、獨りて頭が下がる様になるのが、佛の恵であります。頭を下げて私が悪るかつたと、言ふ氣

には仲々なれなかつた私共が、悪るかつたと、頭を下げる様になつたのは、丁度唯今の嫉捨山で、親の心を開いて、頭が下ると一つであります。親の眞實心に打明かされて、悪るかつたと言ふ心の起る様になつたのを攝取と申すのであります。吾々は人を不足に思ひ仇に思ひますが、眞實の恵に出會て見れば、私が悪るかつたと、悟る事が出来るのであります。さうなると今迄の様な心とは一變して親を籠に乗りて貰ふて、家に歸りて孝行したといふ如く、我々人生も行路一變して、踵を回らして今迄は人の物取らうとするから、人から迫害するのであります。一たび心が改まりて自分の働くべきことをなせば、自然に物が與へられるのであります。

心だに誠の道に叶ひなば

祈らずとも神や守らん

とあつて、吾々は誠の心を以て、一心に働いて行けば、此方から要求せなくとも必ず我物となつて來る、人生の境遇も開けて來る事となるのであります。私が悪るかつたと、謝罪する時に、親は汝マアそんな心になつて呉れたかと、親の心は何れ位の喜びで、あるか解からぬ。何うして親に對て尻向けする事が出來やう。其



れ程に思ふ親の心が、貫徹して見れば、獨りて自づと頭が下がる様になるのであります。

頼ませて頼まれ玉ふ彌陀なれば

たのむ心も我れと起らず

彌陀を頼む心も、私から起すのではない、佛の方に於ての御親切が貫徹して自然に起させて下さるのであります。そして私が其心の起りて、親の前に頭が自づと下がるのであります。其時親が猶喜んで下さるのが攝取不捨であります。即、

彌陀の誓願不思議に助けられ參らせて、往生をば遂ぐるなりと信じて、念佛中さんと、思ひたつ心の

起る時、即ち攝取不捨の利益に預けしめ玉ふなり。彌陀の本願は、老少善惡の人を選ばれず、唯信心を要とすと知るべし。

私が悪かつたと謝罪れば、親は何れだけ喜ぶか知れぬのであります。彌陀の誓願不思議に助けられ、親や佛の眞實心が知れた其時に、ア、親の眞實は、斯程まで手厚かつたのであるか、彌陀の慈悲は、斯程まで廣大であつたのであるかと、喜びの餘り獨りて親の前に頭が下がり、口に念佛が稱へらるゝ様になるのであります。

親の心が知れ、佛の心が頂かれた時、如來の親は喜びましく、八萬四千の光明の懷の中に、攝め取られるのであります。攝取と言ふ事に就て瞻西上人が雲居寺の如來様に、祈誓を疑らされた其時、夢の告げに、如來様がシカと袖を捕へてはなしたまはず、之を法然上人へ申上げたれば、攝取とは逃ぐるものを押さへて逃がさじとなり。と仰せられたと言ふ事でありませう。逃げやうと思ふても、親が心配して下されて、逃がして下さらないのであります。たとひ再び悪い方へ逃げやうとしても、佛様は引止めて下さる其時が、人生の一番大切な時であります。夫れを振り切つて行こうとすれば、何ぞ知らん其時は、危険な時であるのであります。生涯浮ぶ事の出来ない斷崖の端に立つて居るのであります。行先を見て足下を見ざる者は踏みかぶるべきなり。の格言の通りであります。然るに攝取不捨の御力で逃げたくも逃げられぬのであります。

此の如く一度信仰の門に這入つた人は、其信仰の力に依つて、引止めて下され危険な處へ遣つて下さらないのであります。私共は知らずに居るが、實に如來の慈悲は、廣大であります。歎異抄の次の言葉に

惡をも恐るべからず、彌陀の本願を、妨ぐる程の惡なきが故に。

と惡を心配せず、氣にせず、安心せよ、如何なる惡をも助けねば置かぬと言ふが、彌陀の本願であります。如何なる惡でも、如來の本願を妨げるほどの、惡はないぞと、如何に不實不孝なものもあされたまはず、見捨てたまはぬ御慈悲に遇ふて、初めて佛の眞實心に救はるのであります。斯くして南無阿彌陀佛の眞實心に、安心させて頂くのでありますから、一生懸命に眞實の心を以て働いて行けば、皆さんか自分々の生活の道が、

開けて來る事は、間違ないのであります。和讃の中に

金剛堅固の信心の。定まる時を待てるぞ。

彌陀の心光照護して。永く生死を隔てける。とあります。是が信仰の光景であります。

誠に通俗的な話でありましたが、私が今日態々東京から出て來て、斯く御話の出來たのは、全く私の力ではない。皆佛の力だと、深く感謝する次第であります。信仰の上から申すと、四海兄弟でありますから、どうか此彼岸の中目を御縁として、共に親様の御心を頂き、新しき信仰の生涯に、入られたいものであります。

## 其 一一

嘗て頼山陽先生が、日本外史を著述して、楠公誠忠の義を、叮嚀に書かれ、立派な文章が、出來上がつたので、夫れを自分の友達である、眞宗大谷派の嗣講、雲華院大舎と云ふ人に見せたと、云ふこととあります。此雲華院師は、詩文で世に名高い人で、本年私が、四國、山陽、九州の方面へ、傳道旅行せし際、大舎師の寺に、立寄りました。是は豊前國、古城の正行寺と云

ふ寺であります。山陽先生が、其處から、有名な耶馬溪を見物して、其絶景を、詩に詠じ、筆に書き、著はされたと言ふ、詩文の友人でありますから、日本外史の出來上つた時に、其草稿を示された處が、如何にも、楠公の誠忠が、躍如として、文章に現はれて居るのであります。又皆承知の通り、山陽先生は、勤王の志篤き人であるから、早速大舎師の先達で、當時講師職で



をられる、易行院法海師の、一覽を得たいと云ふので、雲華院が、承知され、法海師に紹介して、是れは頼山陽と云ふ人であります。此度楠公の事蹟を書かれ、今天下に有名な人であります。是非和尚の、一讀を得たいもので、あると云はれた。其とき、易行院法海師は、昔のことであるから、見臺に向つて、書見をして居られましたのであるが、見向きもせずして、聽て、頼山陽先生の顔を、眼鏡越しに見て、云はれるには、貴殿が、有名な、頼久太郎と云ふ人ですか、豫て、噂に依ると、忠孝のことに就て、京阪の地方に、有名であると、聞いて居るが、承れば貴殿は、安藝の竹原に、年を老つた、母親を残して置くと、云ふことを、聞ひたが、母は老人のことで、あるから、随分衰弱して、不自由な、ことであらうと思ふ。貴殿は、それを放つて置いて、忠だの、孝だの、勤王だの、と口先きに云ひ、如何程立派な、文章を書き、文字を綴つて、見た處で、私は決して、感服しない。自分の母親を、故郷に放つて置て、楠公の忠孝を、言ふて歩るいた所が、俺は、感服しない、ソんな不忠不孝な人の、文章は見ると、厭やだ、御断り申すと、見臺に向つて、書見

して、居られたと、云ふことである。すると山陽先生は、之れを黙つて、聽いて居られたが、深く心に感じ、懺悔せられたものか、靜かに、禮をして、直ちに、木屋町の宿に歸つて、早々行李を整へ、其足で、昔の道を急いで、安藝の竹原へ、歸つて行かれたと、言ふこととあります。私も現に、安藝の竹原へは、度々参りましたが、今でも信仰家の、澤山居る所であります。山陽の子孫に非常に信者があります。それからと云ふものは、非常な、孝行者となられ、其晩年と云ふものは、頗る奇特な事だ、母を常に伴ひ、秋は嵐山の紅葉を眺め、春は吉野の花を、探るなどして、母を種々と慰め、孝行を盡されたと云ふこととあります。是れは有名な話で、南條文雄師の、常に話さるゝ所であります。此話は、吾々の心に、留めて置かなければならぬ、話してあると思ひます。御同様に、斯く申す私が、今の山陽先生の如く、口にこそ信仰を稱へて居るが、さて自己を省ると、誠に懺悔に堪へない、次第であります。自分の親も、現に故郷に在り、そして自分の寺を、守つて居て下さるのであります。其れを捨て、自分は、斯の如き席に立つて、皆さんに、話をして居るが、願

れば澤山な、總ての恩ある人に向つて、何等御恩報謝も致さない、實に淺ましい心中であります。是等有縁の人々を、顧ると、自分としては、此彼岸會にも、亦何れの方面から見ても、立つ瀬がないのであります。今云ふのは、他でない。是等人生の問題を、唯一つ、解決するが、信仰であります。

春秋二季の、彼岸と云ふことは、日本特有のことであるが、古いもので見ると、支那、印度にはなし、日本、許りに於てであると、云ふこととあります。春秋に於ては皇室に於かせられて、春季皇靈祭、秋季皇靈祭と、申して、御歴代の、天皇の御靈を、御祭りなさる日であるが、又同様に、下々に於ても、祖先を追懐し、親を弔ふと、云ふことに、なつて居るのであります。先程申しました、事柄に就て、何ういうことに依つて、吾々が、安心することが、出来るか、又た、如何ういふ、道に依つて解決が出来るかと言ふ事を御話いたしませう。此二季の彼岸を始められたのは、恐らくは、聖徳太子であります。聖徳太子は、三寶を興隆し、人々の、歸向する處、信仰の一つにありと、云ふことを以て、人生の立場と、されたのであります。先程か

ら申す、種々の事柄は、一つの、信仰に依つて、解決するより、他はないのであります。私共が、親に孝行する、と申しても、今申す、山陽先生ですらも孝行が、出来ないとすると、實に、我々の如きものは、云ふ迄でもない事とあります。護良親王は、鎌倉土牢より奏せられた上書に

日月照らず不孝の子。

山川載せず不忠の臣。

と仰せられて、斯くの如く、土窟で、日暮をすると、言ふのは、不忠不孝の罪なりと、申されたと云ふ、こととあります。護良親王すら不忠不孝と申さるゝ、況んや、不忠不孝な吾々が、如何うして、安心することが、出来ませう。然らば、如何にして、安心することが、出来るかと、申しますと、我々精神の病氣に罹り、精神の貧しき者を認めて、救つて下さる、其救ひに、依らなければ、吾々は、他の何物を以ても、安心することは、出来ないであります。

凡そ救ひと、言ふことに就て、種々あつて、食物を興へるのは、物質救濟、病に罹つたものを、本復させるのは、病氣の救濟、精神の貧者を、救ふのは、精神の救濟、



難破船、を救つてやるのは、難船の救済等、種々な救済がある、同様に、吾々は、信仰の方に、依らなければ、生死の海に、難破されて、苦しみ、迎ても、精神的に助かる道は、ないのであります。

茲に宗教上の、安慰と云ふは、心の救ひと、言ふことてあります。諸々の障り、諸々の罪、諸々の苦しみのある、吾々の境遇でありますから、如何なる點を、考へて見ても、吾々は苦み惱むより外、仕様がなないのであります。その私共を、遣る瀬なき思ひを以て、苦しみ惱むところの、吾々を、苦惱の中から、救つて下さる眞實心が、佛の心てあります。如何なる、罪深いものも、不忠不孝な私共でも、遣る瀬なく、思つて下さる、親や、佛の、救ひがあると、總ての人々が、其親の心を聴かして貰つた、一念に、皆救はれて、安心出来ぬものが、安心の出来る様になり、平和な心になり、なるのであります。それが、心の救ひてあります。聖徳太子が、三寶を興隆し、佛法僧の、三寶の、救ひに依つて、なければ、我々の救ひの、道はないと、示されたのであります。聖徳太子は、日本國民が、斯の如うに、心の底から、佛を敬し、信仰を得る様にと、春秋二季の、彼岸會を、定められた

に、なるのでありますから、是を實行するのが、肝心てあります。

人皆有<sup>レ</sup>黨、亦少<sup>シ</sup>達者、是以<sup>テ</sup>或<sup>チ</sup>不<sup>レ</sup>順<sup>ニ</sup>父君<sup>ニ</sup>乍<sup>ラ</sup>違<sup>フ</sup>隣里、然<sup>レ</sup>上<sup>ニ</sup>和下<sup>ニ</sup>睦、諧<sup>ニ</sup>於<sup>テ</sup>論事<sup>ニ</sup>則<sup>チ</sup>事理<sup>ニ</sup>自<sup>ラ</sup>通、何事<sup>レ</sup>不成<sup>ス</sup>。

近頃の世の中では、一人一黨と云ふことを云ふが、一人一黨と云ふのは、是は自分の主義をのみ主張するので、如斯うだ、如彼だ、と他人の主義を味ふこともせないで、自分の勝手な理窟ばかり、主張する人てあります。然し兎角世の中は、皆黨派であつて、四人あれば四人、八人あれば八人て、皆互に如斯うだ、如彼だと云ひ、又たは人が善とか悪ひとか云ふのが、抑も悪いのであります。何れ程仲好くして、行かうと云ふても、なか／＼、左様甘く行くべきものでない。人の心は、何うかとする、荒々しくなつて來ることがある、是が所謂惡の基と、なるのであります。

人皆有<sup>レ</sup>黨、亦少<sup>シ</sup>達者、是以<sup>テ</sup>或<sup>チ</sup>不<sup>レ</sup>順<sup>ニ</sup>父君<sup>ニ</sup>乍<sup>ラ</sup>違<sup>フ</sup>隣里、然<sup>レ</sup>上<sup>ニ</sup>和下<sup>ニ</sup>睦、諧<sup>ニ</sup>於<sup>テ</sup>論事<sup>ニ</sup>則<sup>チ</sup>事理<sup>ニ</sup>自<sup>ラ</sup>通、何事<sup>レ</sup>不成<sup>ス</sup>。

自分の親の云ふことさへも、表面従順にして居るが、

譯を、心の底から、聴かせて載き、佛の救を受くるやうに、せよと、せられたのが、今日の日柄であるから、何うぞ、皆さんが、聴いて、信仰の人となつて、貰ひたいと、思ふのであります。

偕て暫らく御咄しの序として、申上げますが、聖徳太子が、人生生活の模範を、示されたのが、乃ち十七憲法であります。是は推古天皇の朝に於て、政治上の事のみを、制定されたものでなくて、人生に對する、光明とも認むべき、我等日常生活の、手本として、示して下されたものであります。

一に曰く以<sup>テ</sup>和<sup>ニ</sup>爲<sup>ス</sup>貴<sup>ニ</sup>無<sup>レ</sup>忤<sup>ニ</sup>爲<sup>ス</sup>宗<sup>ト</sup>。

とあります。總ての間違ひは、多く争ひより、生ずるもので、家庭に就て考へても、社會に就て考へても、亦在監者として、同じく周圍の人に就て考へても、何處にあらうとも、人間は、仲好くして行くのが尊ひので、人が善いとか、悪いとか、云ふのが、悪いのであります。總ての人は、平和を尊び、心に平和を望まぬ人は無い。處が彼の人は六ヶ敷い、顔付きをして居ると、云ふのが間違ひてあります。他の人と争ふことさへなくば、皆悉く、和いて行くこととなり、従つて争ひがないこと

腹の中では逆ふて、何解つて居ると、云ふ合に日送りをするから、終には隣り同志すら、仲悪くなるのであります。是は人生の大問題であつて、今更云ふ迄も、ないのであります。十九世紀から、二十世紀にかけて、各國が國際上、武器や彈藥の上に、制限を加へ、平和會議と云ふものを、設けたのであるが、文明の今日に於て、歐羅巴の目下の有様は、如何うであるかと云ふに、實に慘たるものであつて、平和は悉く破れて、空中からは、爆裂彈を落すとか、毒瓦斯を送るとか云ふ譯で、悲惨なことであります。之れが即ち人皆黨ありてあります。夫れと同じで、親子の間、兄弟の間に於ても同様であります。先般私は七十有餘日の間、傳道旅行して、自分の寺に戻り、報恩講を営みますと、一人の青年が、他の人と共に來て、御聞かせに預りたいと、申しますから、其人の經歷を、聴いて見ると、それははひどい人で、親兄弟に反抗して、遊蕩をし、人生に失敗し、全く致方ない様にして、人生を辿つて來た、人てありました。私は其人に、話を聞かして、來たのであります。が其道理は自分が善くて、他が悪いと思ふ心、是が基だ、今迄の苦勞を考へて見ると、親兄



弟、其他の周囲の人に對して、自分で動機を考へて見ると、互に争ふのが、皆基てあります。人間は是れがないとよい、表面は従順でも、心で苦しんで、居る人があります。終に世界の戦争の起る様になるのも、皆其れから來るのであります。表に現はれる所のが、諸々の形となつて、來るのであります。聖徳太子の時に、物部氏と蘇我氏とが、互に黨を組み軋轢して、朝廷では、非常に困難されたので、聖徳太子が、斯く十七憲法を、御作りなされたのであります。其れで第一條に誠めて次の文に

上和下睦 諧<sup>ハ</sup>於論<sup>ニ</sup>事則事理自通何事不成

と言はれたのであります。總ての人が、善惡を云々するから、互に争ひが、起るのであります。争ひさへ止まれば、互の間は、自然仲好くなるのであります。其所に人生の解決は、出來るのであります。然らば、何う解決すれば、宜しいかと、申しますと、唯今申す通り、何んな人でも、争ふ事は欲しないのである、罪を犯し、悪しき心を起して、互に争ふ事は、止めなければならぬ、と言ふ事は、能く解つて居るが、之れが出來ないのであつて、私の懺悔録の中の信仰の一章に此所を

書いて置いたのであります。

人生は、五分五分の隔て心と、言ふものが、皆人間の心の苦しみの、基てあります。人と人と互に隔て合ひ、社會と人と自分との間に、互に牆壁を置いて、考へて居るから、總て人が心を苦めるのであります。即ち此の隔て心が心を苦しめるのであります。此の牆壁のため、世界の大戦争も、出來て來るのであります。然らば、其の世界に對する牆壁は、何うしたら、よいかと言ふと、其隔て心を、捨てれば、よいのであります。友達に斯う思ふ、彼あ思ふと二重にも、三重にも、疑ふて、身をせばめるのであります。私の實驗に依ると、此の牆壁を脱れたいが、而しながら人間には、如何うしても取り去る事が、出來ないのであります。いや自分が好くすれば、よいのであるが、自分の方が、惡いから、仕方がない、之れだから、善い人々には近づけない。親切にはして呉れるけれども自分が如斯だから、彼の様な人の所には、近づけない、と自分の方から範圍を、定めるのであります。て人がよくても、惡くとも、親しくして行く事が、出來ないので、之れが人生の缺點であります。支那の善導大師は、散善義の中に、

説いて置かれた比喻に、私共の生活は、丁度、野原か砂漠の様な所を、獨りて旅をして居る様なものであると言つて居られます。吾々は心の中を、考へて見ると、一人旅をする様に、何れの方面を眺めても、眼に入るものは、何もなく、一人旅に、似て居ると言ふので、さう言はれたのであります。親兄弟と、去年の今頃は、如斯うして居たのに、今日は、斯んな身の上となり、親兄弟に濟まない。誠に申譯がない。と思ふ心が、確かに改悟であり、又た反省であります。けれども、凡て人は、濟まぬ／＼と思ひ乍ら、其濟まぬことを繰返すのであります。如斯うすれば善いと、言ふ事は、充分知つて居るが、仲々如斯うなれぬ、隔てなければよいが、さうは行かぬ。それ故吾々の心に、不平が起り、不満が生じ、疑ひの心が出來、隔て心が増して來て、自然に、吾々の心が寂しくなつて來るのであります。

それ故、眼に觸れ耳に聞こゆるもの、皆悉く、瓦礫や、土砂の如うなものばかりで、一つとして、自分の心を打明けて、語るに足る、話相手とは、無いのであります。丁度廣い沙漠や、野原を、獨りて旅行する様に、眞に寂しい獨り旅であります。寂しいばかりなれば、ま

だよいが、野原には、猛獸も居る、毒蛇も居る。猛獸は、遠く地平線上の彼方から砂煙を立て、牙を怒からして、現はれ、毒蛇は身邊近く毒を吹いて、迫つて居る。進むも、退くも、皆死せん。如何せんと、思ふ矢先へ、群賊途中に現はれ、我れを誘ひ、迫害を、加へんとする有様と、同じ様に、吾々の心の中は、疑ひ隔ての心から、種々なる疑惑起り、煩悶起り、其の苦痛のため、精神悶々として居る時に當り、種々なる群賊の、誘惑に逢ふて、吾々は、深みに陥落して、悶死するのであります。之れを王陽明は、

山中の賊は、平くるは安く心中の賊は平くるは難し。

と言はれたと言ふ事でありませぬ。目に見るもの、耳に入る所のもの、一つとして、誘惑の、種々なぬものはないのであります。されば觀經の中に

爲<sup>ニ</sup>煩惱賊之所<sup>レ</sup>害者<sup>ニ</sup>説<sup>ニ</sup>清淨業<sup>一</sup>

とあります。世の中の種々な誘惑は、皆煩惱の賊であります。其煩惱の賊が、四方八方から、誘惑し、吾々を迷はし、うろたへ、騒かせ、遂には、身の置き所のなきまでに、墮落の淵に、陥し入るのであります。我々



が他を疑ふことから、世の中が、た頼りなくなり、寂しくなつて、遂に墮落の淵に、陥ち入る人も多いのであります。すると一方から蛇や、蝸の様な、ソネミ、ネタミの心が、益々烈しくなつて、来るのであります。眞に群賊悪獸に追立てられて居る有様であります。仕方がないから、西の方へ行こうとすれば、行くこと百歩にして大きな川あり、北の方を眺めると、水河滔々として、浪立つて居る、之れは貪慾であります。南には火の河、炎々と燃え上がつて居る、之れは瞋恚の川である。此の貪慾と、瞋恚の川のために、前に進むことが出来ない、退かんとすれば、群賊悪獸に襲はれて居る。行くも死せん、歸るもまた死せんと言ふのは、吾々の現在の實況であります。或人が病氣にかかり煩悶憂愁の結果、時々刻々予の身體を誅殺せんとする者の如し、之を思ひ彼を考ふれば、現世生存の趣味何によりてか之を解せん、狂するが如く、亂するが如く、此五尺の體軀を如何に處して可なるべきかを知らず、我にして我に非ず、進まんか進むに道なし、退かんか退くに處なし、予は實に煩悶苦闘の極點に達し、人類の失心する、正に此の苦痛の一瞬時にあるを覺えしむと書いたもの

た。丁度其日は、雪の降り積つた日で、あつたものだから、雪の中をトボ／＼と、歸つて参りました。すると途中に乞食子供が、跣足で、其雪の中を、多勢の子供に、逐ひまくられ、取り圍まれて、泥や、草鞋を、投げ付けられ、虐められて、居りました、然るに乞食の母が來まして早速之に出會ひましたので、早速馳けつけて、母がいたはるなり、子供が飛びついて相抱いて泣くのを見て、其友人が初めて自分の身につまされました。實に自分は此乞食の子供と同様であることに、それを今日まで氣が付かずに居りました、が自分の現在の境遇は、其子供と、同様に、逐ひつめられた境遇です。四方八方から責め立てられて居る境遇であります。然るに大悲の親は

西岸上に人ありて呼んで曰く、汝一心正念にして、直ちに來たれ、我能く汝を護らん、總て水火の難に墮する事を、恐れざれ。

と散善義にあります。人生に於ては、何の方面に向ふても、出る道はないので、ありますが、大悲の親の、やる瀬ない同情の御聲を聞くなり、直に救に預りて今初めて、世の中へ出して頂き、夜が明ける事と、なつた

を、讀んだ其時に、私は深く其人に同情した次第であります。吾々は善い事をすればよいが、善い事は、仲々出來ない。悪い事より出來ないならば、悪い其儘でも、構まはぬといふことにもなれない。隔てる事は、いかぬが、それも止まぬ。善い事を、仕様うとすれば、色々な誘惑があつて、出來ぬ。悪い事でも構はぬといふことにはなれぬ、隔てなければよいが、疑ひの心が起つて、知らず識らずの間に、隔てる様になるのであります。斯様な鹽梅に世の中總ての人は、外からも内からも、苦しんで居るのであります。其苦しみを、逃れやうと思ふて修養してみても、その修養が仲々出來ないのであります。

私が今年長崎に、参りました時、私の友人で宗教界のために、大に盡し、人望を得て、人生を甘く、切り廻して、居られた人があります。其人が私を尋ねて來て呉れました。其人が云はれるには、私は此度躰きが出来たため、右からも、左からも、上からも、下からも、四方八方の周圍から、壓迫されて、立場を失つて、しまつた。それで餘儀なく大勢の前に、詫びなければ、ならぬ事となつて、無念の涙を流して、多勢の前に、謝りました。

のであります。西岸上に人ありて呼んで曰く、汝一心正念にして、直ちに來たれと。私共を汝と呼び下さる、呼び聲が聞えた一念に、信仰を得るのであります。

信仰と言ふ事は、決して、六ヶ敷しい事はないのであります。けれども、唯人にさへ頼れば、信仰とのみ思つて、もたれて、居る様では、眞の信仰の味は、解るものではないのであります。宗教は、人の頼りとなり、なるものと思つて、此方から頼る様では、駄目てあります。私がかつて、山陽の方面へ行つた時、廣島師範の或る教員の方が、私の所へ出て來て、どうも、私は、人生が、寂しくてならぬに依つて、何ぞぞして、信仰を得、宗教の力に依りて、力強くなりうと、思ふて、御尋ねに参つたと、言ふて來た事があります。それを見て見ると、私にはどうも佛と言ふものが解かりませぬ。いくら、佛を、信仰し様としても、信仰する事が、出來ない。どうも私の弱點が、心丈夫にならぬ、どうしたものでありませう。と申されるから私は、大體お前さんは方角が間違である、弱いのは、汝さんが弱いので、私は何も知らない。弱いと言つて、仕様がなないぢやないか。弱いのは君だけの事であつて、我々



の知るところでは、ないじゃないか。一體君は佛に依つて、強くならうと思ふのが、間違である。全體君の様に初めから人に頼よると云ふ様な、心を持つて居るのが間違である、と叱りつけました。其人は私に優さしい、言葉でも、掛けて貰つて、慰めて頂かうと、思つて來られた、様であつたが、豫期に反し、ひどい言葉をかけられた、ものだから、涙ぐんで居られた。だが言葉を續けて、其の君の心の弱い所を見て下さるのが、佛であります。其頼るべなき君を憐みたまひて、どこくまでも御見捨なき大慈大悲の親様が佛様でありますと申すなり、其人が忽ち御慈悲を感じたのであります。

福島縣の、中學校の、一生徒が不用なものを買て其請求書が來りたとき、父親は昔風の、大變八釜しい人であるものだから、大層呵りまして、其金だけは與へるが汽車賃も辨當代も一文も與へるものではない。握飯でも貰つて、草鞋掛けて、出て行けと、叱られた、ものであるから、仕様ことなしに、握り飯だけを貰つて、トボ／＼と出て行つてしまつた。其後父親は、母親を呼んで、お前は子供の汽車賃を、やつたか、どうだと、聞かれた。すると、母親は、やりませぬといふたら父親

は大層不機嫌で「ナニ與らぬ、此馬鹿もの奴、汽車賃無しで、彼の遠い路を、仕様ががあるものか」と、叱りつけられた、と言ふ事だ。

父は打ち母は抱いてかなしむを、  
かわる心と子や思ふらん。

と言ふ歌があるが、母親は、どうしても、優さしいもので、之れに反し、父親は大變八釜しいものであります。だが、腹の中では母親と少しも異なることはない、皆、同じく、子供可愛の念より、外にないのであります。父親は、恐ろしい許りが、父親でない、又た、母親は、優さしい許りが、母親ではない。母親にさへ、頼めば、金は呉れるもの、父親は、恐ろしいもので、父親が、叱ければ、子供は、縮んでしまうものであります。貰ふものを貰ふのではない。とても貰へぬと思ふて居るところへ、下さつたので實に思ひがけないのであります、是が即不思議の味である。

人生は、佛様が助けて、下されるとのみ思ふのが、間違です。同情者のあるものを、同情して下さるのには無い。助け様としても、助ける事の出来ないものを、助けやうと、骨折つて下さる、大慈大悲が、佛の

本願であります。助ける道のないものを、見捨てずに助けずば、おかぬとあるが、佛の大悲心であります。さればこそ、歎異抄の中に、

善人なほ往生す、如何に況んや、悪人をや。

とあります。世間で言ふならば、彼の人の様な、悪人でさへ、助かるのであるから、善人の助かるのは、當前だと申すのであります。私共は悪いものは、悪い、善いものは、善いと言ふ事は、百も知つて居る、それであるから、悪は止まる筈だが、實際は仲々に止まぬので、あります。口傳抄の中に

悪業の凡夫、過去の業因に引かされて、是等の重罪を犯す。是れ留め難し。伏し難し。また小罪なりとも、犯すべからずと、言へば、凡夫心に、まかせて、罪をは留め得べし、と聞ゆ。然れども、元より罪體の凡夫、大小を論せず、三業皆、罪にあらずと、言ふ事なし。

等と、此次は改心し如斯うして善い方面へ、活動しやうと、思ひ考へて、居るのであります。恐らく世の中に、左様思はぬ人は、一人もなからう。悪い事は止めて、善い事をしやうと思つて、居るが、煩惱の業

に、引かされて、仲々に、其の悪い事が、止まぬのであります。其の止まぬ、私共の、總てを、知り盡して、救てやらうと、仰せられるのが、佛であります。

其の悪を止め、善を仕様と思へば、善をする事が出来る善人ですら、佛を信ずれば、助かるのであります。まして其悪の止まぬ、疑ひや、隔て心の止まん私共が、疑ひ隔て心のために、四方八方から、苦しめられ、虐められて居る、私共、親や佛の心に、反ひいて居る我々を、見捨てないばかりでなく、救つて下さる、廣大な、御慈悲が、佛の心であります。此の御心が思ひ知られて、悪い事が出来ぬ様になるのが信仰であります。人生上には、色々の苦みがあつて、私共は、實に味氣ない人生を、送つて居るのであります。

斯様な鹽梅に、隔て根性が、止まぬのであります。それが爲めに、種々な苦しみを、受けて、悶へ惱むて居る様を、佛様は、御覧になつて、私共を、氣の毒に思ふて、何所までも、同情して下さるのであります。それ程までに、私共の心を、知ろし召し、遣る瀬なく思召す、佛の眞實心が、眞に心の底に、思ひ知られたのが、信仰であります。



また、第二條には、

篤敬三寶、三寶者佛法僧也。則四生之終歸。萬物之極宗。何世何人非貴是法。人鮮尤惡。能教從之。其不歸三寶。何以直枉。

とあります。凡そ世の中に於て、虫類であらうが、禽類であらうが、獸類であらうが、人間であらうが、生きとし生けるもの、皆悉く、佛の救ひ、佛の恵に依らなければ、甘く世の中は、渡る事は出来ない、のであります。如何なる人と雖も、此の恵に、依らなければ、此苦みを、逃れる事は、出来ないであります。「人鮮尤惡、能教從之」であつて、人は、世の中に、生れ乍らにして、極惡非道な人と言ふものはない。また、初めから、惡事を好む様な人も、ないのであります。皆人は惡い事は、してはならぬと、思ひ乍らも止むを得ずして、犯す様になるのであります。それ故能く教へさへすれば、敢て仕なくとも、濟む様に、なるのであります。親鸞聖人が、他方の本願を説き、信仰の門に入る事を、勧められたるのは、茲にあるのであります。私の懺悔録にも、書いて置いたので、ありますが、彼の提婆達多に、唆かされた、阿闍世王は、自分の

と言ふものは、死ねば、未來も何もなく、なるものだから、何も未來を、御心配遊ばすに、及ばぬとか。人間は死ねば、又た人間に、生れて来る、ものであるから、若し假令、病で命がなくならうとも、再び世の中に、出て来る事が、出来るとか。何とか、言つて、色々、實に淺薄な、理屈を並べ立て、慰め様と、するのであります。けれども、病に苦しむ者に取つては、道理や理窟では、慰められる、ものではありませぬ。そこで、大王は、善婆と言ふ、醫者を呼び寄せ、仰せられるには、「善婆よ、余は今重病である。正法の王に對し、惡心を以て、暴逆を加へたから、病氣に罹つたので、之れは、什麼な良薬でも、どの様な看護人でも迎ても、癒るものではない。今余が爲めに、無上の醫者がない。何とかして、余が病を癒す、良薬はあるまいか、此の苦しみを、救ふて呉れる、道はないだらうか。」と、如何にも、法を求むる真心が、言葉の上に溢れて居るのを見、之れを聞いた、善婆大臣は、觴一杯の同情を以て、王を慰めて、言はれるには、「今大王は心から慚愧してまします。實に結構な事で、御座います。が如何にも仰せの通り、此の大病を、癒すもの

父親を、牢屋に入れ、其上に、母親が父親を、匿まつたと、言ふので、又た、母親まで、苦しめ、我母是賊と、叫びつゝ、惡逆を企てられたと言ふ、阿闍世王は後に至りて、心に深い後悔をなし、胸中頻りに、熱し惱み、全身に、惡瘡を生じ、臭氣甚だしくして、近づく事の出来ないほどの、大病に罹られた。阿闍世王、自ら思はるゝ様う、自分が斯くなるも、皆惡事の酬である。惡事の酬は、靦面であるから、唯今にも、地獄に墮ちるで、あらう、と、大に恐れ、苦み惱やむに、至られた。愈々迷の夢醒めて見ると、堪らない。夜となし、晝となし、苦しめられて、身の置き所もない。母親の看病も、更らに効がない。其所で、阿闍世王は母親に向ひ、申されるには之れは、「私の心から、起つた病氣であります。肉體丈の尋常の病氣とは、違ひます。夫れ故、とても人間の手では、癒るものでは、ありませんまい。」と、如何にも、失望落膽の極に、達せられ、身も心も、惱亂して、現在未來の苦痛煩悶が、一時に起つて来て、正に、大山の崩るゝ如き、有様であつた、と言ふ事であります。其時に當つて、六種外道と申して、諸の哲學者が、交るゝ、出て来て、人間

は、外には、ありませんまい。唯迦毗羅衛城の、淨飯王の皇子、悉達太子と云ふ、別に御師匠もなく、獨りて御悟りを開かれ、無上菩提を得玉ひた、佛陀があります。世界中に、比ひのない、勝れた方であります。金剛の如き、智慧を以て、能く衆生の、一切の罪惡を打ち砕いて下されます。苦惱の癒らぬと、言ふ様な心配は、少しもいりませぬ。」と、斯様に話して居る中に、虚空の中に、何者とも知れず聲ありて、大王に告げて言ふ様う、  
『世尊久しからずして、涅槃に入り給ふから、早々、佛陀世尊の所へ行つて、御救ひを蒙れ、佛陀世尊の外には、助けて、下さる方はない。我は、今其方を、不便と思ふ故、勧め導くのじや。』  
大王此の語を聞いて、恐ろしく感じ、五體震動して、芭蕉樹の如く、震ひ上がつて、天に向ひ、「雲の中で、さう仰せらるゝは、何方で御座る。」と、尋ねられた。すると、また、空中に聲あつて、

「我れは、是れ、汝が父、頻婆沙羅じや、其方疾くも、善婆の言葉に従へ。邪見の輩、六臣の勸に、附いてはならぬ。」

此の父の親切な言葉を聞いて、愈々心苦しくなつて、



氣絶して、倒れて仕舞はれた。其れと同時に、體中の瘡が、一時に、劇しく、痛み初めたので、七頭八倒の苦みに、陥られた。すると其時、佛世尊は、蒼閣岷山にましまして、月愛三昧と言ふ定に入られ、定中から大光明を、御放ち遊ばされて、其の清らかな、涼しい光明で、阿闍世王の身を、御照しになつたのでありませう。すると、其通り劇しかつた瘡も、一時にスツカリ、癒つてしまつたと、云ふ事でありませう。今日は、秋の彼岸でありますから、親の事を思ひ出し、親の存命中には、如斯ういふ事があつた、世の中に居る時、墓参りをした、時には如斯であつた、如彼であつたと種々の事を、思ひ出されるのでありませう。之れを宗教的に、考へて見ると、心に解れる事柄は、皆精神上の問題であつて、今日、彼岸の中日に當つて、親の生前を、思ひ出す時に、親の言葉を、眼前に聞く事が、出来るのであります。阿闍世王が、空中に、父の言葉を聞かれたのは、嗚ではない。我々とても、眞に、親の心が解り、前非の夢醒めた時には、現實に、父の言葉を聞く事が、出来るのであります。親は自分の身の亡くなつた後も、尙ほ、子供の身の上を案じ、常に護つて下さると、言ふ事が、此の阿闍世王の語に依つても、思ひ當るでありませう。阿闍世王の病氣が、何故に斯く、爽かに全快したかと言ふと、之れ皆親の護りが、あるからであります。佛の月愛三昧の光に、解れる事の出来たのも、皆親の恵みに依

つて、佛の救ひに預る事が、出来たのであります。私は、カッテ煩悶の結果、立つても、居ても居られぬ事となつて、病氣に取りついた、事がありますが、病氣本腹して後、考へて見ると、確かに、九月十七日であつたと、思ひますが、私は此の日、初めて信仰に這入り安心の出来得る身の上となつたのであります。今阿闍世王の事を、考へて見ると、人の事とは、思へないのであります。阿闍世王は、夫れから、蒼婆に導かれて、佛の説法を、聞かれる身の上となつたのであります。其時佛阿闍世王に對して法を説きてのたまはく、汝の父頻婆沙羅王が、佛を供養せられたために、王となられたために、汝は父の王を殺すことになつた、我供養を受ならんならば、王とならぬ、王とならんのだなら、汝は父を殺すことはなかつたであらう。汝等罪あるべくは我等諸佛も罪あるべしと、同情を表せられた、其一言に、今までの迷の夢が、初めて目醒めた、のであります。丁度韋蘭の林へ、梅檀の木の実を一つ、植へ附けた、様うなものであります。どうか、今までの心を、翻然とひるがへして、新しき人生に、立ち歸り、現在に、安穩な立場を、得らるゝ様に、せられたいものであります。さうなれば、此の彼岸に出會ふた、所詮もあり。また、人生の生き道が解かつて来る様に、なるのであります。

(横濱監獄に於て)

近角常觀著

人生と信仰

版五 定價三十錢 郵税四錢

懺悔錄

版八 定價二十錢 郵税四錢

右二書は是非どなたも御一讀下さるべし

近角常觀校訂

冠頭 執持鈔

定價三錢 稅六册迄二 施木用小册

施木用小册子に部數に應じ割引す

毎日曜午前八時

求道日曜學校

求道會館

規定

本誌は毎月一回十日發行とす  
 本誌は一切前金にあらざれば御注文に應ぜず  
 本紙の代金は可成振替貯金口座にて御送金の事  
 郵便爲替にて御送金の節は爲替振替局に必ず「本郷森川町郵便局一宛の事」を記し一割増の事  
 郵券代用は一錢切手にて一割増の事  
 凡て送金受取人名宛は「東京本郷區森川町一帯地求道發行所」とせらるべし  
 本誌の購讀者は住所姓名を詳細に楷書にて申送らるべく、轉居の節は新舊兩所の宿所を通知する事  
 同答を要せらるゝ方は相當の返信料を添ふべき事  
 本誌定價左の如し

一部郵税共	六ヶ月郵税共	一年郵税共
金拾四錢	金八拾錢	金壹圓五拾錢

●廣告料五號活字一行(二十六字詰)一回金拾錢

大正五年三月十日發行  
 大正五年三月七日發行

發行所

東京市本郷區森川町一帯地  
 電話下谷二二四二番  
 振替口座東京一六六九六番

大賣捌所

東京市神田區  
 同京橋區  
 大阪市南區  
 東京市北區  
 德永隆西文庫

求道發行所

編輯人 近角常觀  
 印刷人 近角常觀  
 近角常觀  
 近角常觀  
 近角常觀



大正五年四月十九日求

講 話

每日 曜午 前九時  
求道學舍

〔木郷區森川町一番地〕

每土 曜午 後二時  
第一求道會

〔九段坂佛教俱樂部〕

每月二十七日午後七時  
第三求道會

〔日本橋綱穀町説教所〕

求道第拾卷第貳號 大正五年三月十日發行(毎月一回十日發行) 大正五年二月五日第三種郵便物認可